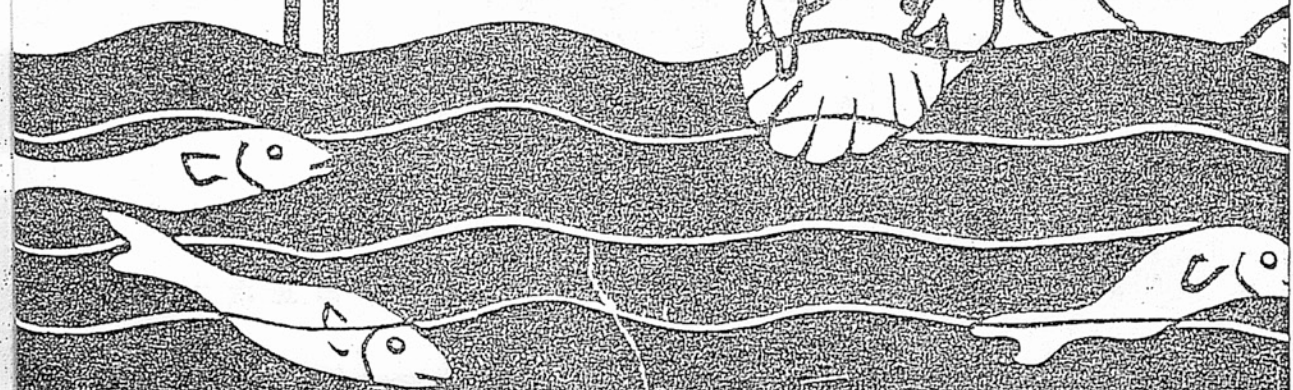
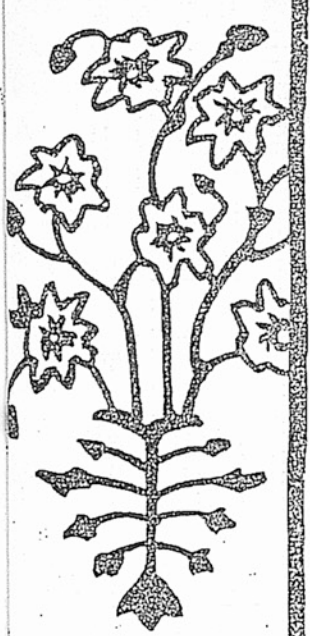


求道

第 一 卷
第 一 號



求道第一卷第一號目次

- ◎改題の辭
- ◎活ける理想は人生を靈化する
- ◎薄伽梵歌の他力致
- ◎日曜講話
- ◎求道の真意義
- ◎佛敎之真髓
- ◎無題錄
- ◎茶話
- ◎懺悔
- ◎予か信仰に關する質疑に答ふ
- ◎かの夜
- ◎湖聲錄
- ◎新刊紹介
- ◎政教時報

(社説)
楠 龍 造

近角 常 觀

近角 常 觀
師崎 嘲 風

鈴木 卓 苗
島田 南 村
百目 木 劍 虹

近角 常 觀

波岡 茂
天都 城

(政教子)

◎昨年の日曜講話の概況◎早稻田大學敎友會◎第一高等學校
德風會◎報恩講◎日曜講話◎大谷派改革事件◎高輪佛敎大學
事件◎高田派改正◎編輯餘錄

規 定

- 一、本誌は毎月一回(一日)發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
- 一、但郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべし
- 一、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
- 一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一、本誌定價左の如し

| | | | | |
|-------|-------|---------|-----------|---------|
| 一 部 | 一 月 | 六 月 | 一 年 | 郵 税 一 冊 |
| 金 拾 錢 | 金 拾 錢 | 金 六 拾 錢 | 金 壹 圓 拾 錢 | に 付 五 厘 |

◎廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治三十七年一月卅一日印刷
明治三十七年二月一日發行

發行兼編輯人 百目 木 智 健
印刷人 白 土 幸 力
東京市本郷區森川町一番地

發行所 求道發行所
(電話下谷二四三三)

大賣捌所 東京市神田區神保町 東 京 堂
同 本郷四丁目 明 堂

改題辭

時代の風潮は一世を擧げて、眼光を専ら信仰問題に注がしむるに到りぬ。信仰なき政治は沙上に築かれたる宮殿の如く、信仰なき教育は食鹽を加へざる羹の如し。個人にして信仰なきは生命なき也。社會にして信仰なきは精神なき也。今や有道眞摯の士は内心苦悶を實驗して私かに人生の意義を研究せむとし、志操清淨なる人は理想を實現せむが爲めに向上の一路を辿らむとす。求道の氣運蓋し現時の如く切實なるは未だ嘗て見ざる所なり。是茲に本誌を改題して名くるに『求道』を以てする所以也。

頭を回らせは本誌初めて世に出てたるは實に六年已前の事に屬す。當時世人が冷眼宗教を藐視したる其極に達したりき。而して本誌の發刊は實に佛天の戒雷たりし也。爾來社會の舞臺に眞面目に宗教問題の幕は開かれたり、若し世人を警醒して眼光を一轉せしめたるの點を以てせば稍素志に酬ひたりと謂ふべきか、然れども國家は未だ崇高の理想を擧げず、社會は猶和融の樂土を來たさず、前途茫として希望の光明夫れ遙也。如かず、先づ國家の地盤たる各個人をして理想を擧げましめ、社會を組織する各細胞をして健全なる信仰を得せしめむには、是信仰問題を標榜して力を專注せる所以也。此に於てや『政教時報』の目は其實に伴はざるに到りぬ。今や乃ち年の改ると共に其第百八號を以て『求道』第一號とする所以也。

言ふ勿れ理想の遠き歩々道を辿りて之を極むること難しと。言ふ勿れ天下の廣き人々道を傳へて之を盡すこと難しと。經に曰く。譬へは大海を一人ありて升量せむに、切數を経歷して、尙底を窮めて其妙寶を得べきが如し。人至心にして、精進に道を求めて止まざるあらば、會、當さに尅果すべし、何の願か得ざらむと。叩くものには開かる可く、求むるものには與へらる可し。

求道

第一卷
第一號

活ける理想は人生を靈化する

人にして理想なくむば昏々たる一肉團に過ぎざる也、國にして理想なくむば冷々たる修羅場に過ぎざる也、宇宙にして理想なくむば渾沌たる無始無終の闇黒世界に過ぎざる也。

希臘の大賢プラトンは萬物は皆理想の實在を説けり、其理想や、絶對美、絶對善、絶對大の存在を認め、之に到達せずむは止まざらむとす。彼の理想や唯是れ觀念のみ、而も猶能くソクラテスをして獄中從容として毒を仰て瞑せしめ、プラトンをし

て平和なる孤島に理想の社會を實現せむと企てしめしにあらざるや、
吾人の理想とする所は活ける佛陀の救濟也、慈ある佛陀の光明也、智ある佛陀の生命也、此光明あるが爲めに吾人は内心の煩悶を解脱して大悲の清懷に攝取せらるゝ也、此生命あるが爲めに吾人は人生の意義を發揮して永久の平和を開闢すべき也。

人生は洵に一大迷宮なり、一たび之に入る、茫乎として其適歸する所を知らず、期する所忽爾として去り、望まざる所、突如として來る、人事の起伏は必しも數學的法則を以て打算すべからず、天然の顯象亦偉大なる警戒を吾人に與ふることなしとせむや、宇宙の大謎は遂に人間の力を以て解き得べからざる也。

吾人は忽然として此人生に在り、右せむか、左せむか、仰て濠穹を望む、九天蒼々として其窮る所を知らず、俯して深淵に臨む、斷崖萬尋、一たび墮落せば遂に運命の如何を知るべからず、人若し冥想一番眞摯に考察し來らば、天下の廣き、猶六尺

の身を容るるの所なからむとす。

古賢吾人の靈魂を譬へて曰く、恰も一人の馭者羽翼を有せる二頭の駿馬を駢へ驅るが如しと、其一は天性頗る溫良、容易に之を馴致すべし、他は甚だ獯惡、徒らに驕傲を極め惡辣到らざる所なし、苟も調御其所を得むか、天馬空に翔りて紫微天門の間に朝せむと欲す、若し一たび惡馬の奔逸に任せむか、彼、人生の軌道を脱して狂暴底止する所を知らず、百千由旬遂に下界に墮落し了せむとす、嗚呼精神の修養豈一日も之を空しくすべむや。

何物か吾人をして向上の一道を辿りて、眼光を雲漢に向て放たさしむるか、曰く崇高なる理想是也、人若し一たび理想を攫取せむか、人をして俗界を超越して、清淨の境に遊はしむ、理想は洵に人をして眞化せしめ、善化せしめ、美化せしむ、若し一たび理想に達せむか、恰も昇れ飄忽風に御するが如きもの、高く上りて益々理想の崇高を知り、理想の崇高なるを知るに従ひて、身は益々雲漢に近くに至る、理想は洵に人格を高めしむるの雲梯也、精神を修養するの砥礪也、人生若し理想なからむか、人生は其意義を有せざるもの、興味索然として恰も蠟を嚼むが如けむのみ。

理想は靈なる活力あり、一たび之に解るゝものをして靈化し盡さずむは止まざらむとす、人にして之に交らむか、忽ちにして人を靈化する、物にして之に接せむか、直ちに物を靈化し了せむと欲す、蓋し人世の事、變遷常なく、其期する所必すべからず、獨り理想に至りては千古清潔にして一點の缺損あることなく、多少の増減あることなし、却て此の如き變遷常なきものを以て永久常住ならしむるもの却て是れ理想の力也。若し世に理想なかりせば人生の間、何ぞ此の如く靈光の透徹するあらむや。

プラトンは會話篇「フエドルス」の中に理想の愛を叙して曰く、美は天上の容姿に伴ひて輝きつゝある者也、彼若し地上眼前に來ると雖、是最も純潔なる感覺の間隙を求めて、其清淨無垢の光を發洩する者、若し人世に生れて素璞にして猶且つ前世に於て常に榮光に觀得したりし人は其美なる神的清貌を見て、神聖端嚴の相好に驚愕せざるはなし、先づ一瞥の下、疎として身戰さ、亦宿世畏敬の餘情は自ら油然而として湧き來り、恰も神に對するが如く、尊崇の念禁する能はず、若し他に狂人を以て目せらるゝを恐るゝにあらざるは恰も神像に對するが如く身を投して之か犠牲たるを辭せざるべしと、是實に神聖なる理想の愛なる者

ゼウスの神がインスピレーションを凡人に下すに由るといふ、如何に理想が他を靈化するを見るべき也。

ダンテのベヤトリチエに於ける、く理想上の靈化なりダンテをして詩人たらしめしものはベヤトリチエ也、ダンテをして信仰に入らしめしものはベヤトリチエ也、昔は遂に彼女を理想として其熱情を歌ひ、彼女を靈化して信仰の秘鑰を掌るの天使とせり、ダンテは夢中「愛」の人格を感じせり、一夜室内火色の霧を以て蔽はれ、中に髣髴として基督の幻影現はれ、ダンテを眺めて言ふ所あり、彼は片手に血色の衣を纏へる少女を伴ひ、他の手に燃ゆる心臓を弄ぐるを見たり、其他靈夢數ふべからず、而してダンテが最も心血を凝ぎたる神曲の中心は實にベヤトリチエなり、彼は彼の女の死するや彼は益々彼女を理想化し、靈化し去りて、彼が詩篇の中心となし彼が神學の目眼となし、彼女の導きの下に彼は天國に入る事を描き出せり、蓋し是れ中世時代に於ける敬虔熱烈なる信仰を諷ひて餘蘊なき者、數百年間唯一の文學也。

華嚴經は釋尊菩提樹下に悟入し給ひし理想也、成道の曉天に徹觀し給ひ法界の義天也、萬里渺茫として香水の百川を納れ、星宿燦として寶光の萬像森々たり、洵に是れ佛陀の眞智を極めて含識の靈源を盡したる者、而して善財童子は實に此理想海に轉じて菩提の彼岸に到着したる求道者也、童子初めて娑羅林中に詣して、文殊菩薩に參す、象王顧盼し、獅子頻呻す、一たび智光に照破せられ五衆の益々頓に初心を啓きて信仰の門戸初めて開く、爾來切實道を求め、五十三の智識に遇ふ、時としては刀山に上りて身を火聚に投し、或は艶女に遇ふて性欲の空なるを了す、又武神に參して嶮難の惡道を免れ、群童と嬉戯して鳥語風聲皆修養の材料たるを悟る、遂に佛前に詣して、普賢菩薩の靈光に遇ふ、白象王に乘じ、紅蓮座に處す、智慧圓滿にして行願功成り、遂に佛陀の靈源を窮む、何ぞ其舞臺の廣大にして、其理想を追ふの氣力百折不撓なる、若し吾人深く其妙味を味はむか、吾人人生に於ける修養の行路を示し給へる者、而して其間に活躍せる靈界の妙用洵に思議すべからざる者あり、嗚呼、是求道者の尋ねべき偉大なる一大理想にあらすや。

此に至りて吾人の理想を披瀝すべき時に達せり、吾人の理想は無限の光明也、無窮の生命也、唯一救済の靈勅也、彼文殊の利劍も此中に在り、彼觀音の慈光も之か分化たり、清淨なる智慧は能く吾人内心の暗黒を潔くし、哀々たる慈悲は吾人胸中の苦惱を融かす、一佛の名字能く八萬の法門を盡し、一念の信心頓に百大劫の修行を越ふ、我之が爲めに命を捧ぐ何ぞ惜まむ佛は永久の生命なれば也、我之が爲めに軀を捐つる何ぞ傷まむ佛は攝取の慈光なれば也、東方佛國の大衆、咸然天樂を奏して其德を謳歌し、十方微塵の世界遍く其光明の中に赫灼たり、慈眼涼しくして普陀落山に德音を傳へ、智光冷かにして清凉山頭に尊容を現す、時として吾人の胸臆昏々として開黒の中に葬り去られむとす、忽然として一道の光明内心の奥底を照す、時として行路崎嶇四方梗塞し來りて進む所なからむとす、顧みれば一條の活路既に救済の門戸を開けり、噫我佛陀に入れるか、佛陀我に宿れるか、稱して融と云ふか、名けて道交といふか、千歳の日月恰も午時の夢の如く、萬里の大空殆むと窓外の清風に似たり、之を佛陀の攝取と云ふに可也、我は確かに佛陀の慈懷に入れば也、之れを信心回向と云ふ洵に可也、佛陀は吾人の胸中に寓し給へば也、實に是理外の理、無義の義、唯人生をして意義あらしめ、世界をして平和ならしむる靈活なる一大理想也と謂ふべき也。

古來佛教の各宗の開祖は皆に此靈活なる源泉に汲みて、法流を萬代に傳へ、枯渴の蒼生に清泠の生命を與へたる者、感嘆せずむはあらざる也、而して親戀聖人の如き寧ろ此理想の權化也と謂つべき也、看よ聖人の道を求むる、實に頭燃を拂ふか如し、其切實なる、山王權現に詣し、寒風凜烈の夜六角堂に祈禱を捧ぐ、當時聖人求道の苦悶洵に見るが如し、世人時として聖人の史傳靈夢に關するもの多きを嗤ふ、吾人を以て之を見る、却て是如何に聖人が靈感冥想に富みたるかを徴すべきもの、救世菩薩の告命の如き、若しダンテの夢を味ひ、ロッセッテの思想に同感し得るものたらんには、寧ろ此の如き理想の人を吾人が祖先中に有するを誇るべき也、若し夫れ先師法然聖人を以て智慧の權化として、尊崇するに勢至菩薩を以てし、深く聖德太子を愛敬して觀音の化現と爲し、和讃を作りて恩徳を感謝するに至りては、洵に情操の高潔にして温雅掬すべきを見るべき也、特に師に連坐して遠く流謫に處せらるゝや、從容として傳道の機會を得たるを喜び、却て師恩を感謝せられたるが如き、聖人の内心、如何に能く人生の意義を發揮せられつゝあるかを示す微光なり、而して佛陀在世中に於ける最大悲劇たる提婆阿闍世の逆惡に對して深遠なる觀察を下し、活ける理想の光明を以て此修羅の血闘を靈化し來りて大聖權化の救済的事實也と美觀し、自ら其身を

逆惡の中心に置きて熱烈なる懺悔を捧げ、佛陀の大悲に感泣せらるゝを見れば、如何に聖人の人生觀が深遠なるかを知らざるべき也。嗚呼聖人の一生は聖人の信仰也。聖人の聖教は文字を以て讀むべからず、信仰を以て讀むべき也。聖人の信仰は言語を以て解すべからず、生涯を以て解すべき也。聖人の信仰や内心に於ける理想を以て見るべからず、聖人の史傳や人世の事實を以て見るべからず、彼醇熟せる信仰が生涯の上に實現して如何に靈活なる人生觀を陶鑄したるかを見る可き也。

活ける理想は此の如く人生を靈化し來る、若し人生にして理想なくば物質の紛々あるのみ。若し理想にして人生に實現せずむは、是生命なき理想也、理想の死骸也。

今や吾人の國家に此活ける理想ありや、吾人の宗教界に此活ける理想ありや、吾人の社會に果して此活ける理想ありや、國家は大に戦はむとし、教界は大に動かむとし、社會は大に苦まむとす、豈此活ける靈泉に汲まざるべけむや。頭を回らして古聖賢の神靈に訴ふ、洋々乎として微笑願略し給ふもの、如し、此の如きの國家、此の如きの教界、此の如きの社會は正さには是れ活ける理想を仰望しつゝ、未だ自覺せざるものにあらざるが、佛陀は大なる鞭撻を下して理想の復活を促し給ふにあらざらむや、聽け、鐘聲は既に曉天に響きつゝあるに非ずや。



楠 龍 造

薄伽梵歌の他力宗教

一 印度思想の統合は薄伽梵歌なり

薄伽梵歌の他力宗教を論明せんとするにあたり、先づ薄伽梵歌の何たるを知らざるべからず、「バガヴト、ギーター」譯して神歌と云ふ、「ウィルソンの説に従へば此歌の成りたるは西曆紀元一世紀の頃ならんと云ふ、「マクスミユラの説に従へば此歌の作者は、「ヴィヤサ」ならんと云ふ、固より共に確乎たる断案にはあらざるなり、今日一般に印度學者のとり所は此歌は蓋し紀元二三世紀の間になるならんと云ふ、印度に二大叙事詩あり、一を「ラーマヤナ」と云ひ一を「マハーバラタ」と云ふ、「ラーマヤナ」は七卷に分れ二万四千句より成り、「マハーバラタ」は十八卷に分れ二十二万句より成れり、薄伽梵歌は此「マハーバラタ」の中の一部として存せり、されど薄伽梵歌は本来「マハーバラタ」の一節にあらずして後世の「エピソード」なることは印度學者の皆許す所なり、「パンヅー」王の五皇子、父王死して其兄「ダリトラストラ」の家に養育せらる、「ダリトラストラ」の長子「ヅルヤダナ」悪性にして次子「クナ」僕「サクニ」と相計り、「パンヅー」の國土を奪掠せんことをたくらむ、一日「パンヅー」の第一子「ツル

ヤダナ」の僕「シャクニ」と博奕をなし其國を失ふの不幸を惹き起しぬ、五皇子已むを得ずして叔父の家を出て、森林生活をなせり、後十二年を経て「ヴィテタ」王の朝に仕へ其親任を得、五皇子相計り平和の間に故國を回復せんとせしかどもならず、此に於て兩軍を以て其勝敗を決せんとす、五皇子の一人文武秀絶の「アルシュナ」、親屬と戈を交ゆるを欲せず、頗る脚蹠す、此處に於て「クリシュナ」出て來り、王の柔弱を責め王の職は武士にして戦ふにあり、父のため國のため何んぞ一戦せざると、彼はかくして宗教哲學の深義を説き、此間の思想を「ダイアログ」として發表せるもの、これを薄伽梵歌の結構とするなり。

思ふに紀元二三世紀の交印度思想高潮に達し、一方に古色蒼然たる吠陀あれば一方には深遠なる六派哲學あり、彼處に苦空无常无我を教ふる佛教あれば此處に苦行の外道あり、紛々擾々思想界はまさに混亂のきはみに達せり、打て一丸として之を統一するものあるにあらざれば、人皆其適從に苦しまん時代先覺者の任はまさに此處にあり、薄伽梵歌の一篇、時代の折衷統合思想を代表し、瑜伽僧法、吠檀多の三派を骨子として更に一大思想を案出せるものなり、瑜伽派よりは冥想をとりたり、されどそが魔術的方面は取る所にあざりき、僧法派より神我自性及び其關係をとりたり、されどそが上に實

在神を立てたりき、吠檀多派よりは唯一絶待の實在の神をとりたり、されど彼の如くに万有の存在を極端に否定せざりき、而して更に其上に他力信仰光明攝取の福音を示すに至ては、宗教上豈偉大なる價值を有するものにあらずや、見よ、後世此歌によりて「ワガバタス」の一宗開かれしにあらずや、印度教の大學者「ジャンカラアチャアリ」も之に註釋を施せしにあらずや。

二 他力攝取の根源は實在にあり

世界にありては親の慈悲は尤も深尤も大にして清淨無垢なるものなるよ、慈悲ありて親あるにあらず親ありて慈悲あるなり、他力攝取の大慈悲は偉大超絶の親を要すとは知らずや我は唯の慈悲を感受する能はず、親を知り親の慈悲を感受するなり、嗚呼慈悲を唯に感せよと云ふは空を握るにも似たるかは、信仰に實在を要せすと云ふは、水に文字をかくにも似たるかな、吾人は薄伽梵歌にありては、宗教の根底として實在を如何に思索し如何に渴仰せるかを見んと欲す。

薄伽梵歌に於ける「クリシュナ」は「ビシュヌ」の化身なりとは雖、彼はまた最高獨一の實在なりけるよ、此の獨一の實在よりして萬有の境界は發展し來る、始に不生不滅にして十方にわたりてあますなく、三世に渡りてつきざる无量慧光量光の實在ありて動かざること睡れる如くなりき、其中の「プラクリティ」(自性)は「サッタス」(喜)と「ラージャヤス」(憂)と

ず、「プラクリティ」の三徳動搖して妄想妄境界流出し來るも、そが本源たる神我實在に至ては、十方に渡り、三世を貫き靈妙の至体たるを疑ふ能はざるなり、薄伽梵歌の神は僧徒派の神我と云ふべきよりも吠檀多派の絶待獨一の神と云ふべきなり。

睿智、智識、妄想よりの自由、寛恕、眞實、感覺の抑制、平靜、愉快、苦痛、誕生、死、恐怖、安全、無害、平等、満足、懺悔、能力、光榮、耻辱、有情の是等種々の性情は唯た余より生ずるなり(十章)

余は一切存在の始なり中なり終なり(十章)

余は全世界の生産者なり亦破壊者なり(七章)

梵は最上者なり不可現者なり我が顯現を「アヤトマ」と呼ばる(八章)

不可説、不可現、遍一切處にして不可知、不可思議、平等、不動なるものを

思念せよ(十二章)

太陽も照さず月も火も照さざる所は、人此處に到達すれば再び還らす、是れ

余の最上住處なり(十五章)

余は余宇宙の原因なり(七章)

余は此宇宙の父なり母なり創造者なり祖先なり、知らるべき物なり神聖の思

なり云々(九章)

余は不滅なり亦死なり、オ「アルジュナ」よ、余は有なり又有ならず(同)

之を要するに神は材料原因なると共に活動原因なり、萬物の創造者維持者なると共に破壊者なり、遍一切處なると共に過境的實在なり、主觀なると共に客觀なり、吾人は此の神に對して如何なる關係を有すべきものなるか、吾人は喜憂關三徳動搖の結果生出し來りしものなり、されば常に妄想を起し妄境界に束縛せられ、造業起罪、此處に死し彼處に生し輪廻轉生暫くも止まず、されど一度回顧反省して、神を知るの

「ターマス」(暗)の三作用を具するなり、この三作用動搖し始めて自性此處に開發し大を生し我慢を生し十六見を生するなり、精神的實在は化して物質的境界となり來るなり、嗚呼彼神歌の作者は宇宙萬有の本源として、實在の神をみとめたり、神は在り、而して迷妄の諸現象は如何にして存在せるものや、彼此處に於て諸現象の依て來る所を神の「プラクリティ」に歸せざるを得ざりしなり、「プラクリティ」は其作用として喜憂關を具せり、彼は心的に世界の發展を觀察せり、

自性の支配により其等の意志によらず自性の力により此の存在の全体を反覆生出せり(第九章)

自性は監督者なる余によりて動くものと動かざるものとを生せり、かかる道理によりて、オ「クンチ」の子よ、世界は開展せり(同)

喜、憂、暗の此の性質は自性より生ずる、オ「大なる」の汝よ、自性に不滅の精神を束縛す、かくて喜は汚穢なき結果に於て苦痛を照し且つ脱却す、オ「無罪の人よ、歡喜と智識の紐を以て、この精神を束縛す、憂は愛に溺れさせらるることによりて成立するを恐れ、貪欲と執著より生ぜり、オ「クンチ」の子よ、活動の紐を以て自身を束縛す、暗は愚鈍より生れたるを知るを要す、愚鈍は一切自身を迷はす、オ「パッタ」の子孫よ、うは不注意怠惰睡眠を以て自身を束縛す(十四章)

吾人は既に物質原因たる神の「プラクリティ」を見たり、然らば更に進んで神の何物たるかを討究せん、試に思へ、宇宙法界を心的に觀察せる彼は、自心を觀するの眼を以て宇宙法界を見たるなり、我心は盡ざる泉にも似て妄想妄境界間斷あるなし、されど如何に煩惱妄想さかんなるにもせよ、心性の靈妙尊嚴にして犯すべからざるものありて存するを疑ふ能は

智識を得、寂靜所にありて常に神を冥想し、至誠心を以て神を信仰せんか、我は此處に神と一致し神の力にて涅槃に入るを得べけんかし、嗚呼薄伽梵歌の世界觀は遂に宗教の安心を得んがための道程なりしなり。

世界は單に智識よりみれば「眞」の世界なり、善悪なく美醜なく優劣なくあるものは唯た「眞」なり、されど生々潑潑たる吾人の活精神より見たる世界は「價值」の世界なり、至深なる活精神の要求は世界を神とするなり、神は「價值」の最上なり、神は主觀的內在的妥當性を有すると同時に客觀的妥當性を有するなり、主觀的妥當と云ふ中に客觀的妥當を有せるなりと知らずや、客觀的妥當なくして主觀的妥當のみあり得べきにあらざるなり、「要求原理」にして既に要求を満足せんか、これ「實在原理」なり、薄伽梵歌の實在觀世界緣起觀、自心の性情發展を以て宇宙に附與し價値の要求を以て實在に附與せるなり、此處の見地に立て薄伽梵歌をみんか、甚深の興趣は湧いて止まずらん、我は些々たる教義の是非は今此處に論ぜず、そが實在觀に至ては人心の要求宗教の本質にして、世界の存するさばみ人類のあらん限り長へに滅却せざるを信するものなり、光明攝取他力信仰また此處に淵源するにあらずや。

三 宗教の精髓

鑛山悉く燦然たる金にあらず、深く地層を穿ち、岩石を淘

汰し、種々の手段を以て漸くとり得たるものこれ金なり、薄伽梵歌はそれ嶺山の如きか、そか宗教の精髓を獲得せんとせば、冗長にして空遠なる印度思想の中を廻り行かざるべからず、不用なる僧伽瑜伽吠檀多のある教義を淘汰せざるべからず、有害なる印度當時の儀式習を棄てざるべからず、かくして漸く探り得たるは薄伽梵歌の宗教的生命なり、此生命や薄伽梵歌の生命なると同時に一切諸宗教の生命なり、紀元二三世紀の印度の生命なると共に一切時一切處の生命なり、決して輕々に看過し去るを許さざるなり。

一、智識冥想。人心深奥の要求として最高至妙の實在あり、こは宗教の本質として一切宗教に貫通せるものなり、薄伽梵歌に於て固より然り、如何に此實在に到達すべやとは、尤も重且つ要なる問題に屬す、薄伽梵歌は之に答へて第一にあぐるものは智識なり第二にあぐるものは冥想なり、智識とは何ぞ冥想とは何ぞ、

智識は無明に覆はれたり、故に凡ての有情は迷惑し、自身智識を以て無明を破壊する人々は、智識は太陽の如く最上實在を示す(五章)
 オ「アルジュナよ、能く燃たる火は薪材を灰と化する如く、智識の火は諸業を灰に化するなり(四章)
 入我を崇拜し我を冥想し其他何物をも崇拜冥想せず、常に歸敬せんか、余は新才智を興へ其等によりて得らるる所のものを保存するなり(九章)
 常に歸敬し最高信仰を有する人々は、決定心を以て余を崇拜せよ、余之を歸敬の至れるものと考ふ、感覺の全部を抑制し、一切時に於て一心平靜にし、不可説、不可壞、遍一切にして不可知、不可思議、無差別、不動、永久なるものを冥想せよ(十二章)

走らず、繼續して冥想の状態の濃思を保持する人は、彼に行く(八章)

眞實の悪人余を崇拜し他に崇拜せざりしならん、彼は儘に善考へられん、如何となれば彼は能く決定せるが故なり(九章)

常に歸敬し最高の信心を有し決定心を以て余を崇拜する人は、余は歸敬の尤も至れるものと考ふ(十二章)

オ「アハラタの兒よ、汝余心を傾け彼の中に避難所を求めよ、彼の慈悲によりて、汝は最上の綱、永遠の居所を得ん(十八章)

此世界に於て歸敬者は、功罪二つながら棄つべし(二章)

薄伽梵歌の冥想と云ひ信仰と云ふは、主觀内察の一方面にあらずして、明に客觀の對象に對して之を發起するものなり、而して其信仰其冥想は一心一向最高の「クリシュナ」に向けらるべきものにして、決して余神余物に二心あるを許さず、悪人と雖心を一にして彼を信念せば、彼は信仰により善とせられ解脱を得べし、思ふに宗教の究竟的要義は、大智大悲の至靈の力あり、无智は無智ながら悪人は悪ながら、信仰に依りて救濟せらるべししてふ一點にあり、是れ世の所謂智力的宗教道義的宗教功利的宗教の到達し能はざる、宗教の最高頂點なり、薄伽梵歌の宗教此處に到達せるは、豈に快哉ならずやと云はんや、これ豈に宛然他力眞宗の教義にあらずや、

三、結果を見ざる活動。我にして既に最高の地位に到達せんか、求むべき結果なきなり、我が爲す所一として高尚尊嚴ならざるなきなり、又其中に大少優劣なし、時處諸縁に應じて神の事業をなすのみ、神を知り神を信する人にとりては、一切の事業神の事業にして自己の結果を求めざるの活動な

實在に到達せんとするには、先づ實在の何物たるを知るの智識を要するなり、智識は人に於ける眼なり、眼に依て萬象明に行くべき方向決定するなり、我等は無明に依て眼を覆はれたりき、故に行くべき道を誤り業を作り苦界を出るに由なかりき、今や智識の眼は開けたり、行くべき道は明なり、妄業は作らんと欲するも作り得ざるなり、財産地位人類の眼にあらず、學術文藝人類の眼にあらず、實在をみとむる智識てれ人類の眼なりけり、此の智識なきを稱して醉生夢死の人と云ふべけれ、冥想は静寂の閑所にありて實在を冥想し實在と心的交通をなすなり、されど薄伽梵歌の冥想は廣くして、如何なる時如何なる事をなすも、實在を念して之を爲さんか、之れ冥想たるなり、嗚呼冥想は神と交る唯一の通路なり、

二、信仰。信仰固より智識冥想に離れたるものにあらず、信仰あればこそ智識冥想あるなれ、智識冥想あるは信仰の存在する所以なり、されど薄伽梵歌に在ては、信仰は通常諸宗教に云ふ意味より深き意味を有せり、即ち信仰は他力攝取を示すものなり、實在の大慈悲救済を示すものなり、これ宗教の極致を示すものならずばあらざるなり。

余を念せよ、余に生命を捧げよ、互に教へ余を語れ、彼等は常に満足又幸福なり、斯く常に歸敬し愛を以て歸敬する人に、余は彼等が余に到達すべき智識を興へん、而して彼等の心に住し、智識のかがやける光を以て、余は彼等の情より出てたる愚疑の暗黒を破壊せん(十章)
 汝の精神を決定し而して余を理解せんに、汝は余に来るべし、此處に一の疑義を容れず、オ「アハラタの子よ、最上實在神を考ふる人、一心決定他に

り、結果を求めざるの活動豈に偉大尊嚴にあらずや、

オ「ダナンガヤよ、歸敬より行動をなせ、執著を棄て、成功不成功平等にあれ、カハる平等を歸敬と云ふ(二章)

犠牲、報償、懺悔の行動を棄てざるべし、彼は爲されざるべからざるものなり、犠牲、報償、懺悔は聖賢に對する神聖の手段なり、オ「アハラタの子よ、余の行動にしても執著と結果を棄ててなすべきを要す、これ余の秀絶せる決定せる意見なり(十八章)

利己主義の感情を有せず、汚辱の精神を有せざる人は凡て此人民を殺すと雖殺さざるなり、行動に依て束縛せられざるなり(同)

智識及び經驗を以て満足せる歸敬者は、其人は不動なり其人は感覺を制止せり、其人は石炭、石、黄金は同一なり、之を歸敬されたりと云ふ、最高者に歸敬せし人は、眞希望者、朋友、敵を平等に考ふ、其人は無差別なり、兩面を部分とす、其人は憎悪者親密者善惡の對象なり(六章)

世に敵あり味方あり、善あり惡あり、されど我の之に對するや、利己心を棄て結果を求むる心を棄て神の業にしてなすべきを行ふ、豈に偉大神聖ならずや、世に石あり黄金あり美あり醜あり、されば我の之に對するや、執着なく偏頗なく、共に平等の價值あり、豈に神聖ならずや、

四、世間と出世間は一なり。薄伽梵歌に在ては世間と出世間は一なり、歸敬者は唯た神の業として一切をなすべきのみ、此間に二者の區別を設くる必要なきなり、喜憂閑の三徳に束縛せられ、種々の妄想を起し妄境界を作ると雖、一度神を知りて之に歸敬せば一切神ならざるなく一切の事業神の爲ならざるなし、何んぞ世と出世とを問はんや現世と未來とを問はんや、これ薄伽梵歌の絶待迷妄論にあらずして汎神論たる

所以なり、汝何事を爲すとも、何物を食ふにも、何等を貧人に與ふとも、如何なるものを供物になすとも、又如何なる懺悔をなすとも、それは總て予が爲めにせよ、オ

「アルジュナ」(九章)

五、階級の打破。薄伽梵歌は、所々に印度社會の四姓の階級を嚴守すべきを教へたり、されど平等宗教の歸する所、宗教問題につきては平等を唱へざるを得ざるなりき、これ社會の風習、如何なりしにせよ、宗教としては遂に此處に到達せずには止む能はざるなり、

其故は、カー「プリター」の子よ、罪惡の中に生るる人も、婦人、毘舍首陀羅も同一に、余に歸依して最高目的に到達せん(九章)

薄伽梵歌に無用の論議なしと云はず、棄却すべき事實なしと云はず、されど上叙の教義の如きは永遠に朽さる宗教の大眞髓にあらずや、

四 馬鳴の「起信論」と薄伽梵歌

起信論の教義、之を詳叙するの暇なし、唯たそれを要をとりて一言せん、一心に二種の方面あり一は眞如一は生滅なり、生滅門の現象千種万狀なりと雖、眞如の靈妙依然としてもとの如し、眞如は一法界總相の体なり眞實識知なり光明なり、余は無明生滅に依て生死に流轉すと雖、一度實の如く眞如を知り得んか、妄雲長く滅して最高實在に到達するを得べけん、愚者无力者大智見の開く能はずんば彌陀の他力によりて救済を求むべしと、これ豈其教義に於て其大精神に於て起信論と

薄伽梵歌と姉妹の如く兄弟の如くなるにあらずや、乞ふ二三の類文をあげん、

相大とは謂く如来藏なり無量の性功徳を具するか故(起信論) 大梵は余の藏なり、余はそれに種子を注ぐ、カー「バラター」の子孫よ、一切のものより生出す(十四章)

所謂不生不滅と和合して一にあらず異に非ず(起信論) 余は不滅なり又死なり、カー「アルジュナ」よ、余はある所のものなり又あらぬ所のものなり(十章)

自然に不思議の業種々の用あり、即ち眞如と等く、一切處に徧す、又亦用相の得べきことあるなし(起信論)

彼は人々の中に賢なり、歸敬を有せり、其人は行動に於て非行動をみ、非行動に於て行動をみる、行動の凡の結果の執着を棄て、常に満足して何物にも屬せず、彼は行動に關すと雖凡に於て何をなさざるなり(四章)

當に知るべし、如来勝方便あり信心を攝護す。謂く意を專にし佛を念する因縁を以て、願に隨て他方の佛土に生ずるを得て、常に佛を見て永く惡道をばなる(起信論)

此身体を棄る所の彼は、最後の瞬間に余を念し此世界より出發し、余の本質に來る、此處に一の疑あらず、故に一切時に於て我を念せよ、汝の意を決定し余を知るならば、汝は余に來るべし、此處に一の疑あらずなり(八章)

其他類文を求めば疊々盡さざるものあらん、思ふに薄伽梵歌と起信論の間、一條の精神貫通せるものありて存す、これ故なくして然るものならんや、乞ふ他日稿を改めて之を論究せんかな。

日曜講話

求道の眞意義

近角 常 觀述

本日は私が本年になつて始めて出席したのであります、本日の題は求道の眞意義であります、先づ求道の文字は近頃よく用ひられる言葉で、全体求道とは、普通では道を求むると言ふことでありますが、佛敎の上では菩薩と言ふ語がある、菩薩とは菩提薩埵と言ふことで、菩提と云ふは道、薩埵とは人と云ふことで、求道の人即ち菩薩である、然るに菩薩と言へば道を求めて特殊の悟を開かれた人に用ひらるるが、廣く云へば眞實に道を求むる人即ち皆菩薩なのである、故にまた信仰なき人が信仰の門に入る場合にのみ用ひらるはあまり狭きに失する次第であり、菩薩の道を求めらるる態度は完全圓滿なる佛果に到らざればやまぬのである、之を以て見れば求道の眞精神は、下吾人より、上佛陀に到るまで一意眞面目なる向上直進の眞意義を言ふので、實に味ふ可き意味をもつて居る文字である。

さて普通未だ求道の念の起らなかつた人がある、縁にふれ

て道を求むるやうになり、信仰に就て考てなかつた人が一朝深くそのことについて考へるやうになる、このことについては實例に乏しくない、而して今は此求道の態度に就いて述べて見ようと思ふ、求道者の態度は最も眞面目でなければならぬ、即ち道に向つて全力を傾注するのである、古より求道者が或は身を投じ命を捨てたものも多くあつた、最も近き例を言へば諸君も御承知であらうが、近頃京都の東本願寺に宗教の改革がある、夫に就て信徒の一人が去る十五日未明種々感激の餘途に割腹して死んだものがあつた、死夫自身につきては別問題として、その死んだ人の精神を考ふるに、實に一點の餘裕なき眞面目なもので、眞に信仰の極に達せる人である、その時丁度私も京都に居つたものであるから、其十五日の朝は私も本願寺に参詣したが、其朝は何となく佛前に於て大に感に打たれたのであつた、其後右の話を聞いて益々深く感じた次第である、委細右の事件を聞けば其人は本願寺の大門右の堀の際と敷石の間に於て朝三時頃屠腹したのである、身には白衣を纏ひ、そうして傍に書置が置かれてある、それを見るに生れは越前福井の人で、名は兒玉次郎吉年は三十二である、別に教育あるものでもない、書置の言は普通の考よりすれば種々批評も出來やうが、其人の精神は到底普通の人間の言ひ得ない事が書いてある、此人がかかる始末に立ち至つたのは、先づ第一本願寺を愛するの精神と、第二國家に對して忠誠の

心をもつて居つたからである、其書置の要點はこうである、日本人が道徳を行はぬ、又信仰がない、若し國民に道徳と信仰とがなかつたならば戦争にもまける、本願寺も決して盛にはならぬ、此二つが備はつてあつたら三百萬圓の本願寺の借財位は何でもない、道徳が缺けて居るから教科書事件の如き失態も起る、羽織袴や洋服着て居る、人々が皆不徳を行ひ不義をやつて居るから國家も亡びる、戦にも敗ける、どうか皆様眞面目にやつてもらはねばならぬ、私は何ひとつ力なもので、御本山様に御金を差し上げたいけれども何にもさし上げるものがない、何することも出来ぬ、よつて茲に此一命を捧げて御願ひ申上ます、自分は両親もあり、妻は死んでしまひました、二人の小供がある、嗚呼可愛々々しかし恩愛にひかされては、廣大な佛恩報謝もつとまらぬ、皆様どうぞ道徳を守り、信念の力より、本山のかたき基礎をつくつて戴きたい、本山亡ぶときは佛の光りも失はれる、自分は此命をかけて皆様に御願ひ申す、と言ふのである、普通の人はこの事情を聞かれたれば中々想像も出来まいが、次郎吉その人にとつてはこれが無上の考であり、信仰である、人にして道徳信仰なければ本山も國家も敗滅すると言ひきつたのは實に大膽なる言ひ振りである、猶書置の中には自分が死んで浄土に参りても今日のやうな有様では御開山聖人に出會ふて面目がない、どうか皆様眞面目になつて堅固な信心を得て、一處に

浄土で往生がしたい、日露の戦争でも起つたなら、私は天子様の御傍に居て、國民を守りて居るとかいてある、嗚呼皆總て天の聲である佛の命令である、事實は如上である。その十五日の翌日大勢一堂に集り、その人の爲に嚴肅の讀經をしつて追吊の意を表はしたことがある、その時伊藤大忍氏が感泣しつゝ、一座の説教をせられたが、満座一同悲泣感動した、私も激烈なる感に咽び、涙にもたれ得ず、思はず聲をばなつに至つた、書置の眞先に書かれてある一首の和讃、即ち

如來大悲の恩徳は、
身を粉にしても報すべし
師主知識の恩徳も
骨を挫きても謝すべし

と書き出してある、其人が國の爲、法の爲、捨身報謝の誠意は歴々として顯はれて居る、大忍氏はこの和讃を泣きつゝ、繰り返し説教せられた、誰も小供の時より能くさして居る和讃なれど今始めての如く深く感じたのである、古來身命を抛ちて求道せし人、火中に身を投じて菩提の道に上つた人の例は聞いて居つたが、今眼前に此精神をもてる此人を見るに及んで、深き感に打たれざるを得ないのである、今此人の行爲に關しては前にも言ふ如く批評もあらうが、此堅固なる淨心、此さりつめた考は實に再び見る事が出来ぬ、これについて

思ひ起すが、西洋の殉教者の中にもかゝる事例は少なくない、皆次郎吉ろの人と殆ど相似た精神である、猶書置の言葉は國民に對し、教育家に對し、宗教家に對し、信徒に對し、其他多くの人々に對して、實に頭上に下れる警語、適切なる訓言である、即ち事をなすにあたり、殊に道を求むる人は、まさに全身を抛ちて向はねばならぬ事を教へたものである、今の道を求むる人を見るに多くは此心に乏しい次郎吉は一念を貫徹せん爲めには、両親をすて、子をすて、一身をすて、全力を道の爲めに捧げたので、事實に現はれたる此教訓は眞に偉大なる印象を吾人に與へる、親鸞聖人の和讃の中にも、

たとひ大千世界に
みたらん火をもすぎゆきて
佛の御名をさくひととは
ながく不退にかなふなり

とある、吾人は之を讀んで警諭的の語と見てうつかりして居つた、今此實例に逢ふて慚愧の至である、道を求むるには毫も世の利害得失に考を交へず、眞摯至誠の態度を以てやつて行けばよい、苟も身体を投げ捨てる事であれば、如何なる事でも出来ない事はないのである、彼の華嚴經に出て居る善財童子の求道の態度を見てもわかる、初め文殊菩薩の導きによりて信を起して道に入り漸次五十三の知識に逢ふて眞面目に道を求められたのである、この中に今の實例によく似て居る

のがある、即ち高き針の山の頂上に知識あり、童子に曰ふに茲迄來れ、然ば道を授けんと、童子勇猛その山に登る、下方を眺めば猛火炎々たる千尋の谷である、又知識曰く此火中に入らば道を授けんと、童子更に奮進身を火中に投して遂に道を求められたとある、如斯道を求むるにあつては、前程直進の一路あるのみである、次郎吉の如き人にして、始めてその實現をなし得るのである、茲に吾人は此實例により、目下人生修養の問題に於て幾多の解答が與へらるる事と思ふ、即ち人生長路の間によく此精神をひけて行かねばならぬ、それは獨り肉體を捨てることのみ言ふのではない、この長き路に於て自己を没却して進み行くと云ふのである、常に道を求めて進み行くことで、此見地に立てば如何なる境遇に處しても如何なる事件に逢ふも、悠々として進む事が出来る。

茲に注意を要すべきは、道を求むる事を、唯經文や講義のみならずと思ふは大なる誤りである、そんな狭いそんな窮屈なものではない、日々吾人の周圍に起り来る總ての事件に對して、道は求め得らるるのである、人生の事は兎角不得意な事、不意な事件が有り勝ちであるが、而も此間に立つて眞面目に道を求むる心あらば、そこに必ず光明が見出さるゝ、さうしてその方法は先づ自己の心を没却して事にあたると言ふ事、茲に無限の味が見出さるゝ、彼の廉頗に對する闕相如

の態度について見るもよい、相如、廉頗に向ひ、外國に對して内部の一致を保つために全く自己の利害を放棄すると云はれた、飽まで自分を没却したる、その高潔なる態度は、今の如く直ちに腸に刃をあてたのとは異なるも、而も此兩者大なる理想の爲に一身を顧みざる心のうちに相響き合ふある深き意味があるのである、吾人は此等の事柄を見聞して如何に感ずべきか、道を求むるの人は今も昔も少しも變る事はないのである、親鸞聖人は彼佛在世の歴史中、最も淺間敷悲劇と言ふべき王舎城に於ける頻婆娑羅王殺害の事件を如何に見られたか、大王の子阿闍世はその父王を殺さん爲めに獄に投じ、次でその母違提夫人をも幽閉した、その事件につきては實に深き觀察をせられたのである、和讃の中にその事件に與かりたる人々の名を列擧して次に、

大聖れのれのもろとも
凡愚底下のつみひとを
逆惡もらさぬ誓願に
方便引入せしめけり

と此見地より見れば、親を殺さんとせし罪人、王位を奪はんとせし悪友等、甚しき罪惡の人々を、親鸞聖人は皆は大聖方であつて、吾人凡愚逆惡のともがらを救濟せん爲の導きと見られたのである、實に深く味ふべき事と思ふ、凡て世界の現象、雷に人事に限らず風雨電雷に至るまで、皆悉く吾人の精

神修養の道具でないものはない、眞實に求道の志があれば世界到る處に道ありと云ふ事が出来る、中庸に道は邇にあり離るべきは遠にあらざると吾人は念々刻々修養する事が出来るのである、一度此心になれば此世界は實に微妙の味あり、又後悔と言ふことも起らぬ、あゝすればよかつたとか、惡かつたとか云ふ後悔の出てるのは、全く此妙味を感せぬ人の心である、眞面目なる求道者はたとひ不幸不遇の悲境に陥入るとも、それは我信念を試さん爲であると感ずれば、その心の奥底より信念の大なる力は油然として溢れ、勇氣身に満ち無限の妙味を感じつゝ愈々精進するのである、二に二を加ふれば四となり、四に四を加ふれば八となる、これは普通の理である、何の味もない理屈である、然るに吾人人生の間には常に二と二とて四とならず四と四とて八とならぬ意外なる要素が飛んで來るものである、世界必しも期する通りはならぬものである、此存外の場合にのみぞみて、茲に大なる力深き味を見出し得るは獨り信仰の力である、然れば信仰の力を以て如何に此急場をきりぬけるべきか、まさに深く内心に問はねばならぬ凡そ社會の出來事は轉じて自己の内心に求むるのである、内心に立ちかへり誠に道を求むべきである、佛の御思召は如何であらうか、佛はこれを見玉ふやと云ふ様に、ひたすら内心に省みるのである、如何に複雑なる事件に出遇ふても

かく考ふる時は恰も鐵丸のつき通る如く忽ちきり開く事が出来る、茲に於て佛の力の偉大に、佛の慈愛の深厚なる事を感ずると共に、吾人如何に罪深く、力の薄き事がひし／＼、感ぜらるゝ様になる、身は歡喜の念に滿されつゝ、希望の光は輝々として我等の前程を照し來る、眞に求道の人は自ら計はざるの間に道は開かれ行くのである、社會百般の出來事はその起つた時始めて表はれたのでなく、これを縮寫すれば皆自己内心の上に取りたる出來事と見るのである。

或人が私に曰はれた言葉に、社會腐敗の原因は社會の惡しき爲めにあらず皆自己内心の腐敗の曇りが外に表はれたのであると實に味ふ可き言葉である、社會に曇りのあるは即ち吾人の心に曇りがあるからである、然れば社會の曇りは吾人内心の曇りその原因なのである、先づこの曇りを除かねばならぬのである、事の表に顯はるゝ前、即ち青天白日の時に於ての内心を顧みて大に修養を要する事であると思ふ。故に困難の場合に處する時のみが修養の時機ではない、吾人の心は顛動やむ事なく、常に曇りつゝあるが、それを吃茶吃飯の間にとり拂らはれて行くのである、きりつめて言へば吾人の心のうちに利己的名譽の考は、常に起り日夜その穢き考のうちに沈溺してゐるが、その中に唯一つ佛陀の無染清淨の大慈悲心によりて清めらるゝのである、此大慈悲こそ我等が修養の大根底である、此見地に立てば陸續起り來る内心のあらゆる問題は自

ら氷解し去らるゝ、親鸞聖人が「大聖おののおもろとも」に等と言はれたのも、決して佛在世の歴史にある事のみではなく、親く聖人の内心に引きあて、實驗上縮寫せられたのである、信卷を見れば此奥深き觀察が明らかに伺ひ知られる、其文をいへば誠知悲哉愚禿、沈没於愛欲廣海、迷惑於名利大山、不喜入三定聚之數、不快近眞證之證、可耻、可傷矣、といふのである、我々は外に賢善精進の相を有しながら内には虚假不實の心が満ちて居る、實に罪惡の塊である。獨佛陀の大慈悲によりて始めて救はるのである、そうして此大慈悲光に接して歡喜の念の湧き出る様になつたのが即ち信仰の極致である、吾人は此處に住し此心より割出して世界の總ての現象を見たならば、悉く是佛陀の慈愛の發現を見る事が出来る、近くば日露事件の如きも全く佛陀の吾々に對する警誡である是を以て吾人は事の起るに隨つて益々信仰を鍛へるのである、かく考へて見れば前に述べた次郎吉の行爲にも思ひ至る事が出来る、眞面目になれば身を捨つる事も何でもない、念々刻々に身を殺し、顧みて内心の大本に向ひ佛陀の救済に立ち歸る様になれば、道を求むる事は實に一刻も忽にすべからざる事である、そうして信仰を得た後は佛の理想に至らざれば止むものでない、道を求むるには自力他力の別がある、自力的の求道は時間的に三祇百大劫、他力的の求道は空間的に西方十萬億土、かくの如く區別はあるが、之を要する

に共に佛陀の廣大なる理想を追ふて進んで止まないといふのが求道の大精神である、此大精神を感得した人は、必ず靈化せられ佛化せらるゝ、更に言へば、此大なる理想を以て佛陀の位置に到達するのが人生の意義である、而して求道の意義は此人生の意義を形するものである、之を以て見れば求道の眞意義は人生を靈化せしむる一大事實である、次郎吉は實に靈化せられたる人である、靈化せられたる人であればこそ、驚くべき靈的の言語を發し得たのである、私は割腹夫自身は取らざるも其精神上に於て切實なる求道者の好實例を見て深く感した爲に、此實例に基て聊か求道の眞意義に就て述べた所以である。

每月教壇

佛教之眞髓

近角常觀講述

序論

佛陀始めて世に出て玉ひたる時、一指は天を指し、一指は地を指して宣はく、天上天下我獨り尊し、三界は皆苦なり、我

當に之を安すべしと。實にこれ釋尊の眞面目にして、又同時によく佛教の眞髓を宣言したまひたるものである。英國の詩人エドゥヰン、アーノルドは釋尊の傳を研究して痛く之を感嘆し一篇の詩を作りて名けて亞細亞之光と題した。蓋し西人にして生ける佛陀の面目を始めて味ひたらむには、必ずや在來西洋の基督教以外に一種清新の光輝を發見して其趣味いふべからざるものがあるであらう。故に之を稱して東方亞細亞之曙光といふも尤もの事である。而してこれ當に亞細亞の光たるのみならず、世界の光宇宙の光にして實に釋尊の自ら宣へるが如く天と地との間に於て唯一救済の光明である、而して釋尊は其本領を一言にして云ひあらはし、三界は皆苦なり、我當に之を安すべしと叫ばれたこれ實に實驗的宗教の眞髓にして、釋尊の自ら經たまへたる道にして、また一切衆生のまさに踏むべき大道である。三界は皆苦なりとは、人生問題の極まりつめたる所をあらはしたる實感にして、之を安ずるは涅槃解脱の實境である。佛教の眞髓はまことに世尊初生に於ける御聲に於て言ひ盡されたのである。

佛教の眞髓は如斯直截簡明のものである。然れども今日世人が稱して佛教と名くるものは、其範圍頗る廣漠にして殆と捕捉するに苦む次第である。先づ佛教の聖典と稱するものを擧ぐれば、縮冊藏經に入れるものにて八千五百三十四卷の多さに上り、古來釋尊の自説と稱する經文の如きも、始め華

嚴經より終り涅槃經に至るまで實に廣大にして殆と測るとが出来ない。ある者は原始的佛教のみ眞正の佛教となして、阿含等の所謂小乘經に於てのみ釋尊の眞面目を徵すべしと主張するものがある。近時最も世人の口に上れる大乘非佛説論の如きも、單に經文の本文批評たる歴史的研究に止るべきものか、將た其内容信仰の點に至るまで立ち入りて、之を非佛説なりと斷言するものなりや其邊頗る疑はしい。猶進みて印度より西藏及び支那に傳來せる、所謂北方佛教の有様と、南錫蘭を始としてビルマ、暹羅に傳播せる所謂南方佛教とは殆と同一佛教なる名の下に統一すべからざる程度まで其趣を異にしてある。之に加ふるに印度に於ける有空兩宗の發達、支那に於ける南三北七の開宗、日本十三宗の分派に至るまで、皆其宗旨の特別な色彩を有してある。而して是等の教理が皆同一佛教の名の下に包含せらるゝ故、世人の未だ深く佛教の歴史を知らざる人、始めて指を此教に染むるときは甲のいふ所、乙のいふ所に矛盾し、時としては丙の説く所、丁の説く所に恰も正反對に出るの感がある。世人が佛教を研究せんとするも其要領を攫取するに苦む洵に最もなる事である。況や最も眞摯なる態度を以て道を求め、信仰を觀まむとする人に取

去りて健全なる實と核とを選び出すとである。言を換へて云へば、決して廣漠なる佛教を組織的に講説するの必要もなく、また深淵なる哲理を趁ふて思想を天外に馳する必要もなく、只佛教の生ける實験を復活し來りて、人生問題の解結に供へ、健全なる滋養分として信仰の生命を養ふとである。

猶進みて考ふべき點は、近時宗教の研究其範圍を廣むると共に、諸種の異なる佛教以外の諸宗教をも研究するととなつた、乃ち佛教自身に於てすら其要領をつかみがたきに、尙歴史を異にし根底を異にせる諸宗教を并べ研究するの風潮をじ來た。生比較宗教學の如き、又宗教哲學若くは宗教學の研究なるものが起り來りた。是等の研究に就ては念の爲めに一言を費すべき必要ある。宗教哲學は主として獨逸に於て盛んに起りたるものにして、形而上學の見地に立ちて宗教の教理を研究するものである。こは宗教の根底を哲學的に説明せんと試みるまでにて、決して宗教の生命を發揮する方法ではない、故に過去五十年前までは一時其研究盛なりしも、今は大に其風潮の衰へつゝある次第である。宗教學の如きまた比較宗教學の如き多くは科學の見地に立ちて宗教を取扱はんとするものなるが故に、決して生ける信仰の部門に向ては手の達する筈はない、之を要するに、哲學若くは科學の見地に立ちて宗教を取扱ふものは、恰も植物學の見地に立ちて花の美

を知らんと欲し、生理學の見地に立ちて人生を研究せんと欲するか如きものにして、決して宗教其者の眞面目に觸るゝことは出来ない。故に眞實信仰を求むる意味に於て宗教を研究するには、以上に擧ぐる比較宗教學、宗教哲學、宗教學の如きは何等の効力も見出す得ぬ次第である。

然らば如何なる方法を以て宗教を研究すべきかと云ふに、宗教的見地に立ちて宗教を研究すべきである、言を換へていへば、人生の問題を解結し、信仰を求むるの目的を以て宗教を研究すべきである。此點よりいへば宗教を研究するにはすでに是等の實驗を経たる宗教それ自身に就て研究すべきである、乃ち基督教それ自身を研究するとか、佛教それ自身を研究するとか、古來人生上に大なる力を與へたる宗教それ自身を實驗的に味ふべきである。故に宗教を宗教として味ふには必ず成立宗教ならざるべからず、歴史的宗教ならざるべからずと斷言するを憚らない次第である。世人稍もすれば理想的宗教なる名稱の下に諸宗教の長所を綜合せんと希望する人もある。これ俗に所謂梅が香を櫻の花に匂はせて、柳の枝に咲かせむと希望するやうなものである。或は造花としては出来得べきか知らねども、生ける花としては遂に空望に屬するを免れない。宗教の如きも生ける信仰としては佛陀の實驗を追ふて佛教の路を辿るとか、バイブルに依りて基督教を味ふとさせねばならぬ、西洋に於て軌近思想界の傾向は人生と云ふ

既に如此佛教それ自身を講ずること、定りたる以上は、次に來る問題は如何なる方法を以て此佛教を講ずべきかと云ふことである。前にもいへるが如く、此の講述の目的は組織的に佛教を講ぜんとするものでもなく、また哲學的に研鑽せんとするものでもなく、勿論訓話的に註釋せんとするものでもなく、只佛教の生命を活し來り、其眞髓をつかみ出さんとするものである。此點は從來佛教者が講じたる方法とは聊か其面目を異にする考である。然らば如何なる見地に立ち如何なる方法を以て講述するかは最も考を要する點である。殊に從來世人が望洋の嘆を發しつゝある佛教海に向て、如何なる針路を取りて舟を進むべきか、十人十色、百人百色の説き方をなしつゝある佛教を如何にしてさきり捌くべきか、これ實に此講述の主眼である。今其研究方法の要點を左の二項に概括することが出来る。

一、宗教の信仰と哲學的本體論との關係を明瞭に識別すること。

二、實驗的見地に立ちて釋尊已後各宗派の信仰に同情 (Sympathise) し含蓄的批判 (Immanent Critic) の方法を以て長き歴史を貫ける佛教の生命を攫み出すこと。

先づ第一項に就て詳論せむに、抑々佛教が頗る廣漠にして且つ多岐に互る原因は宗教の信仰それ自身によるにあらずして寧ろ其信仰に伴ふ哲學的本體論に原因するのである。佛教の

考を中心として何事も考ふるやうになつて居る。從て宗教の如きも前にいへるか如く宗教哲學、比較宗教の研究よりも、寧ろ基督教若は佛教夫れ自身を歴史的に人生的に研究するの傾向がある。一二の例を擧ぐれば、ハルナツクが原始的基督教を歴史的に研究して、新しき光を發揮したるが如き、又トルストイが自己の實驗上より基督教を研究して、從來の基督教には殆ど發見すべからざる穩和なる色彩をあらはし來りて、吾人佛教徒をして殆ど佛教と同一なりと思はしむる見解を發揮したるが如き、またリスダビツツ、オルデンベルロの二氏が巴理語の佛教聖典を翻譯して、歐洲の世界に於て未だ曾て味はざりし釋尊の實驗を示したるのみならず、吾人東洋の佛教徒にまで從來の漢譯に於て未だ曾て感ぜざる生氣ある、一種清新なる色彩を與ふるか如き、またマクスミユラ、ドイツン等の諸大家カベダ若はウバニヤツドの如き印度の深遠なる思想界の秘藏を開きたるか如き、皆成立宗教を歴史的に研究したものである。故に今後苟も眞面目に信仰を求めんとする人の爲には、矢張一定の宗教を實驗的に又人生的に講ずること、せねばならぬ、故に吾人は佛教其者を實驗して其味を味へるものなるが故に、世の求道者に向てまた自己の實驗を説きたいと思ふ。故に最初より漠然と單に宗教なる概念の下に諸宗教を比較對論するの愚をなさずして、佛教其者を劈頭に掲げ來りて宣傳する次第である。

實驗は結局涅槃解脱にありて其生命は佛陀に對する信仰である。故に人若し此點に着眼して佛教を眺むるときは佛教は至極單純なるものにして、其間に何等の矛盾もなく亦望洋の嘆を發する筈もない。古來佛教の二大系統として、教理上、歴史上殆ど融和すべからずと見做せる大乘小乗の區別も若し此見地よりするときは至極容易に融和して見るとが出来る。勿論之に就ては精密なる研究を要する問題なるも古來大乘佛教徒が自ら大乘と稱して原始的佛教を小乗と卑しむる攻撃の焦點は、小乗の涅槃は灰身滅智にして虛無に歸するとする事である。即小乗の涅槃は消極一方にして涅槃の眞意義ではない、大乘佛教に至りては之に異りて大に積極的なりと稱し、殊に大乘佛教の旗標とも稱すべきは眞如を説くことなりと主張してある。これ果して正鵠なる判断なりや否や。吾人は考ふるに、如何にも原始的佛教に於て涅槃を説くに消極的言語を大に用ゐつゝあるとは事實である。されど其消極的なる滅なる意義は果して大乘佛教徒が難ずるか如く、心を滅し、身を滅し、世界を滅し、空虛に歸することなりや。これ恐くは原始的佛教を誣ゆる言であらふ。全体涅槃の意義は内心の煩惱を滅し、根本の無明を斷ずるの意味にして、悟の生命までも滅するといへる意味ではないのである。故に若し心を潜めて阿含等の經を讀み、殊に所謂南方佛教の經典を閱するときは涅槃は平和安靜の内の妙境にして決して心身斷滅の意味で

はなく、却て永久不滅、清淨、生命、靈智等の積極的意義を有せることは明かである。猶一種の研究法として參考に供すべきことは、社會學の研究に於て古代人民の思想を追及して社會發達の跡を尋ねるのみならず、亦現今存在せる未開人民若くは異邦人種の思想を調査して、之を各時代に於ける人民思想の實例として研究の材料に供するが如く、吾人宗教の思想を研究するものも、單に書籍上に於てのみ大乘は如何、小乗は如何等と断定し去らずして、現時所謂小乗佛教の行はれつゝある錫蘭、ビルマ、暹羅等の人民に就きて其思想を研究することが最も必要である。吾人が親しく遭ひて尋ねたる此等の南方佛教徒は涅槃を以て決して心身を滅し、世界を滅するの意味となさずして平和なる妙境と考へて居る。猶一步進んで死後如何なる境界に至るかを質すに彼等は永久の平和であると答ふる次第である。されど彼は其以上の事は云ひ得ぬ。それ故猶此方より進みて淨土往生の思想を話すによく理解するものは之を否定せざるのみならず、これ涅槃の妙境を云ひあらはしたるものなりと思考するものすらある。是に由りて之を觀るに、原始的佛教の涅槃は煩惱を滅する意味にして、決して哲學的本體に於て世界を無みする譯ではない。又大乘佛教は其涅槃の積極的意義を廣く云ひあらはして、所謂常樂我淨の徳の實驗をあらはしたるものである。これが大乘佛教の特徴である。唯大乘佛教にいたりては此信仰に伴ふ所

の哲學的本體論を來たして、遂に眞如なる普遍的な一元論の原理を立つるにいたりた。然れども眞如其者は本體論原理にして、之を以て宗教の生命とは見るべきものではない。從て之を説くと説かざるとは本體論の上に於ける變化にして、涅槃の意義に於ては何等の矛盾をも見出すことは出来ない。かく解し來れば從來自ら大乘佛教徒と稱する輩の大小乗の區別とするものは宗教の信仰より見れば左程の意味をも持たぬとなる。

又近頃大乘非佛説論を唱道する人々は、原始的佛教所謂小乗の佛教のみを以て、佛陀の眞説となし。他の所謂大乘經典なる者を非佛説なりと斷言しざらむと試みるものやうである。全体此議論は經文の本文批評若くは歴史問題として攻究すべきである。而して結局は非佛説なる積極的證明を得るとは困難であらふ。例へ現存せる本文の語學及び言語によりて其年代が新しきものなりと斷言し得たりとするも、其本文に先だちてより古き原の本文の存在せざることを證明せぬ以上は何の益もない。假令ひまた經文製作の年時が後世にあることを確め得たりとするも、これが書き物となりとあらはるゝまで如何に久しく口傳せられつゝあつたか分らぬである。況や本文の年代も製作の年時も不確實なる以上は大乘非佛説は歴史上積極的に證明することは恐くは六ヶしいからふ。而して近頃此議論が大に世人の口に上る所以のものは、如此歴

史的問題としてにあらざして、寧ろ思想上の問題として世人の注意を惹きたるものである。尙一層適切に云へば、釋尊自身の口に上りたるものは四諦十二因縁の說法のみにして、所謂諸佛淨土、重々無盡、法身常住等の說法は釋尊の思想界にはなく、全く後世にいたりて出來たる思想なりと云へる問題である。吾人は少しく此點に就て論じて見やう。

靜なる永久の生命に入るものとせば、佛正さに入滅せんとする時に及んで法身常住にして變易あることなしと云へる說法は非常に意味深き意義を有することになる。從て小乗の涅槃經と大乘の涅槃經とは決して矛盾すべき性質のものにあらざして、圓滿なる調和を發見することか出来る。また佛が菩提樹下に内心涅槃の妙境に達せられた境界は深遠廣大にして、決して説くべからざることは、既に小乘毘奈耶律の本文にあらはれてある。而して佛は五七日の間所々の樹下に端座して靜觀默思内心の境界を味ひて沈黙、日を過ごされた。帝釋天強いて佛に請ひ奉るに及んで、佛衆生の機に淺深あること恰も蓮の水面の下に開けると、水面に開けると、水面高く上りて開けるとの區別あるが如きを察し、遂にベナレスの說法を

大乘佛教と兩立すべからざる、消極的虛無論と見たるか如く大乘非佛説論者は所謂諸佛淨土、重々無盡、法身常住等の思想を以て若し極端に云へば原始的佛教と兩立すべからざる、架空説少なくとも原始佛教に於て存せざる思想を附加形容したるものなりと云へる考である。これ果して正鵠なりや否や。此種の論者が原始的佛教の涅槃を解釋することは、矢張前の所謂大乘佛教徒が見たるが如く、消極的虛無の意味にして大乘の涅槃は眞如と同意義のものとして考へてある。故に原始的佛教のみを釋迦の直説と主張する論者は、勞ひ所謂大乘を非佛説として排斥せざるを得ないのである。之を要するに大乘非佛説論者も原始的佛教の涅槃を誤解することは所謂大乘佛教説と同一にして、而も此誤解せる根據に立ちて大乘佛教を非佛説なりと排斥しつゝあるのである。

若し原始的佛教の涅槃の意義をして、前に云へるか如く煩惱を滅するのみにして、一たび此境に入りたる時は平和寂

始め華嚴より終り涅槃に至るまで、所謂大乘經典にあらはれたる思想は、原始的佛教の涅槃と圓滿なる調和を見出すことが出来る。否寧ろこれあるが爲めに佛教の眞面目は了

解することが出来る。然らば此等の思想を以て非佛説なりと断言すべき理由を見出さない。故に吾人は思想上の問題として諸佛浄土、重々無盡、法身常住等の思想は佛陀自身に於て存在せしものなりと考ふる方が穩當である。寧ろかく考へざるべからずと思ふ。而し此等の思想が現存せる經文若くは本文に製作せられたる年代の如何は歴史家、語學家の研究に委ねて、吾人が猥りに容喙すべき事でないと思ふ。かく論じ來れば所謂大乘佛徒が他を小乘佛徒として排斥するの非なるが如く、原始的佛敎を眞正の佛敎なりと主張する論者も、一概に大乘非佛説を主張するは偏見である。要するに哲學的本體論の區別を去りて涅槃の意義を宗教的に理解すれば、大乘小乘の二系統の如きは何れの側に立ちても圓滿に調和することが出来る。

以上は宗教的信仰の點に着眼すれば、大小乘の區別すらも融和することの出来る實例を示したものである。況や各宗派の矛盾異動の如きは皆氷解することが出来る。例せば從來小乘中に於て有部と成實宗とは正反對となつてある。一方は萬物實在なりと主張すれば一方は萬物空無なりと主張する。一見頗る異なるもこれ哲學的本體論の矛盾にして、一方は本體は實在なりと主張し、一方は本體は空なりと主張する丈の事である。而し涅槃の實驗に至りては何れも滅諦の眞理に到達するものである。其他大乘佛敎に於て龍樹の空宗も、馬鳴の如眞緣起も、世親の賴耶緣起も皆これ一見頗る矛盾するが如きも、畢竟哲學的本體論に於ける矛盾にして、若し宗

教的信仰の路を辿り、涅槃の實驗を味ふるに至りては彼此調和を見出すべきのみならず。また歴史上一條の聯絡を發見し得るとである。支那に於ける各宗派の異同の如きも、重に本體論に於ける異同である。天台は事理圓融を根底とし、華嚴は事々無礙を原理とする次第である。然れども此等の相違せる原理は畢竟哲學の部門にして宗教としての生命は寧ろ是等の教理に伴ふ觀法の妙味である。此點に至りては圓融無礙、凡を轉して佛たらしむることは同一と謂つべきである。日本のお天臺眞言の如きも、以て准知すべきである。之を要するに佛敎が復雜になつたも、矛盾のあるやうに見ゆるも此に伴ふ哲學的本體論の上の話である。而るに過去十數年の間は佛敎に伴ふ哲學を以て佛敎の信仰なりと誤解したる爲め、佛敎は高尚であると云へる誤解の爲めに酔ひ去りて却て活ける信仰を顧みなかつた。既に一たび如此誤解に陥りたるゆゑ、各宗間に於ける諸種の哲學の矛盾の點のみ目につきて、其間を貫ける直截簡明なる實驗的光輝を忘るゝに至りたのである。若し此光輝を攫むとを得るならば、煩はしき本體論や高尚なる哲學的論議は何等の必要もない。これ日本に於ける鎌倉時代の宗教即ち禪宗にせよ、若くは眞宗にせよ何れも形而上の根據によらずして、唯一實驗の立場に立ち同工異曲佛敎の新生命を發揮したる次第である。

上來述ぶる如き方針を取りて佛敎の眞髓を攫み出さんとするのが、上に挙げた二項中第一項の意味である。次號に於て第二項を詳論せうと思ふ。

藝術と神秘

(復活の曙光)

精神の交感字應は、即ち此世にある總ての美しい者、善き者、眞なるもの、根底である。此神秘があるから、吾等は美しい者を好み、善き者を愛し、眞なるものを尊び得るのである。又此神秘の根底があればこそ、美しい者、善き者、眞なる者が此世に存し得るのである。此神秘此根底を外にして美を論じ、倫理を談じ、哲學を議するのは無用徒勞である。

吾等の現世生活の精神は此の如きの表象によりて他の精神と交通し、表象に依て實在世界と交通する。此は獨り美術のみでなく、信仰の愛によりて直に神なる精神と吾等とを結びつくる宗教も亦此意味での表象を要する。佛陀が彼の時、彼の國に現はれて目觀るべき身体により、耳聽くべき説法によりて、彼が内心に悟得した絶對の眞理を宣布しなかつたなれば即ち其眞理が具躰的に佛陀の人格に現はれなかつたなれば、煩惱具足の人類は寂光界の理想に依て安立の地を得なかつたであらふ。後世の佛徒が佛陀を以て單に肉躰五十年の生命を有した一人の教師と見ずして常住なる眞如法身の一つの現はれと信じたのは、即ち佛陀なる具象的一人格の表象作用に依て、吾等の精神が無餘根本の精神と交通し得たのである。其根本の精神が果して何物であるか、其信仰か今後も尙世界の人心を支配し得るや否やは今の問題以外である。吾等は只佛陀なる有限の一人格が絶對精神の表象となつた爲に偉大なる感化を及ぼし得た事を過去現在多くの信徒の内心に經驗する事實として認むれば足る。

「常人の覺めたる所は賢人の夜である。賢人が暗黒と見るものを常人は光明と考へて居る」。太陽も照さず、星も月も又彼の電光も輝かざる其處に存する火は果していづれより來つたか。一切の物は此の輝けるもの、反影である。此物の光りに依つて宇宙は照されて居る。固より吾等は特殊存在の現象を空である暗であるといふのではない。只根本の常住の光に照さるゝにあらずんば、吾等は此の現象の眞相を見得ないといふのである。此意味に於て神秘に到達した賢人の晝が常人の夜であることを憫むのである。併しながら其常人の夜も神秘の光に依て忽然として賢人の晝と轉じ得ることを主張する凡ての現象は日月や電光の光である。これ等の光が別々に存在せず、却てそれ等の光りが供給を仰ぐ其源泉の光に着目するの必要を主張するのである。

美術の力も、宗教の感化も凡て表象によりて表はる此の神秘の力である。此の表象の力を認めることは即ち神秘に入るの源で、神秘は即ち一切眞善美の源泉である。(姉崎正治)

同一鹹味

無題錄

求

嬰兒の慈母のふところに抱かれながら、すや〜と寝入りたる、安詳としてむしろその神々しきを思はしむ、われかゝるを見る毎に想ふ。

鈴木 卓苗

みほとけの穰にやすらへる吾等又かくの如くなるべきかと、又かの老母の膝下を離れて雲山万里のかなたに生を營みながら、勇戦奮闘今やその家郷を忘れ、慈母を顧みるに遠あらざる者あり、われかゝるを見る毎に想ふ。

みほとけの慈愛とて蘇りたる吾等は又かくの如くなるべきかと、

世には慈母の懐に己の老を忘れむとし、みほとけの慈悲に溺れ死なんとするものあり、あはれその足立も儘ならぬ身なればこそ慈母は尊き御手をかけてその懐に抱き取り玉ひつれ丈夫三十にして未だ信の家をなさず、あゝ何時までか祿々として徒に佛天に泣訴せんとはするが、

大道以ニ多岐ニ亡羊、學者以ニ多方ニ喪生、

肺をやめる人あり、こゝに初めてオゾン吸入器の神効を説くべし、壯健の人に對して之をなすはあまり迂遠に過ぐ、

今の世の信仰を説き、宗教を弘むると稱する人の甚だしく上者の迂愚に似たるなきやを思ふに堪へざるあり。

自ら無病なりとし、壯健なりとして安ずる者の、唯一寸ばかりノソキに來りたるほどに信、ぜよ悔よと説きす、ひのは、蓋ながら器に水を注ぐが如く、有難き慈悲の涙は徒らに彼等の嘲笑と共にふり落ちて玉と消えなんに。

粟を喰ふものは先づその殻を去るにつとむ。信の苗を植ふとすれば先づ彼等をして自覺の床土を墾かしめざるべからず。

達摩大師已に缺齒の老翁に及び十萬里に航して梁の世に來る、その小林山にあるの時、一人の壯漢あり終宵雲中に立ちて教を請ふも許されず、曉に及び彼は臂を断ちて求道の赤誠いと切なるを示すに及び、大師漸く之を接見し以て遂に洞門二祖慧可大師を出すに及べり。

今の世の信仰を説き宗教を弘むると稱するもの所謂達摩の高風なるものを知らざるべからず。

大洋の岸にさすらひ出て限り知られぬ遠き海原に目を放らまた波の音に耳を奪はれつゝ、たどりゆくに吾知らず聲をあげ腹をしぼりて放歌高吟するを禁ずる能はざることあり、この時や、身も我身の如くならず、聲もわがものゝ如からず、目も耳も足も手も又あのが心さへも今は全くわがものゝ如く、覺えずして、何やらむ大きやかなる手も導かるゝが如く、あのれの身のあまりに小さく頑是なき小兒にも劣りぬべきを

第

一

號

覺ゆるやうにて、夢地をたどるかと思はる。御ほとけを見奉りたる人のこゝろは斯の如きものなるべしと思ひぬ。

われ東北の山奥より來りて都門に入りしこの方最も驚かされたるは我帝都は「渾沌の市」なることなり、隣人は知らざるのみか、家人又相背くことを怪まず、況して自らの心のさまをや。

それ鏡の用や、之に對する人の己の容姿を寫して以て第二の我をつくり、これにより己をさとり自らを飾好するにあり、帝都の市民今や隣人を知らず、家人は背き而して自らを知ることなし、渾沌の市こゝになり、矛盾の生活遂に免れざるか。

されば閑寂なる田家の籬より一羽の牡鶏を盗みとりたる冬の夕、地に印する己の足跡を顧みて流石に之を怖れ耻ぢたるほどの善人も一度都門の塵寰に入れば車馬はせ交ふ大道に於て紋なす足跡の何れを誰のと見わけがたきが如く、自らなせる善行の必ず己に歸すべくもなく、又他人の巧める悪行のあこぎにも我にめぐり來て仇するほどに見ゆらむ都門の生活に住み馴るれば、あゝ止みがたなや、遂に自ら御佛をそしり、眞理をなみするの痴暗に塞さるゝなり、かくの如くして滿都の士女は盲人の寶を争ふが如く各自の運命をば暗中に摸索し得あてむとす、姪祠こゝに賑ひ妖教をこに蔓るも之が爲め、勸業債券を拾ひ「寶さかし」を掘るも之が爲め、今にして想ふ、大聖釋尊のなほ生れまざれば、佛日五天に輝

くことを見ざりし日は、あはれ世界はかゝる渾沌の大塊に似ざりしか、

吾初めて了しぬ。

哲人は世に於ける常夜燈なり、眞理の油を取りて之を己の頭上に燃やし、かくして世を照し、人をみらしるべす、

されば國に一人の哲人を有せざるは、長夜の蘭燈を消したるが如く、世は沈み人は歸ふ、

(二月十二日)

茶話

島田 南村

●私も本年で七十八になりました、モ二つで八十になると考へると如何にも年寄じや、舊臘二十日頃からインフルエンザに罹りて、今に床を離れぬ、莊子に蓬蒿に遁るゝものは人の聲音をきゝて喜ぶとあるが、能く尋ねて下さつた。

●近頃京都へ御出であつたを、兩本願寺とも一鉢どつた、法さへ弘めばよい、金があると弟子供の喧嘩の種になると云ふたをうだ、争が絶へぬと信仰心が減する。

●蘇東坡の大悲閣の記に因敬生悟とあるが、實に味がある語じや、先づ尊敬の心を生じて自然に悟に入ることが出来るの

じや。聖徳太子の篤敬三寶の語の次に、此語を書きて人に與ることにして居る。

◎一旦廓然として悟るなど云へど、中々そうは往かぬ、先づ深く敬する心がなければ信心は生ずるものでない、孔子が非禮勿視、非禮勿聽と云ふたのも此所のことじや、堂塔伽藍なども先づ此敬意を表する爲めに建築したものじや。

◎伽藍佛法など云ひて撥斥するものがあるが私は取らぬ、弘法大師は性靈集の中に堂塔伽藍を建立することは坐禪觀法と同様であるところが流石は大師じや、如何なる行基の作佛でも机の前に倒して置きては難有はあるまい、淺草の觀音様は一寸八分と云ふことじやが煙草入の中に入れて置きては、誰も敬意を生ずるものはなからふ、民をして依らしむべし、知らしむべからずと云ふは實に此所じや。

◎私は仰信と云ふことが難有い、貴方も仰信のことを御書きであつたが、全体世に迷信など云ふものがあるが、苟も信の名のつくものならば結構じや、全体物事は理窟で分つたとして夫てよいと云ふことはない、楞嚴經を讀めば理窟は分かるが夫ては十分でない、之に修行が伴はねばならぬ、夫故楞嚴壇を築きて咒を誦するではないか、新佛敎の様に修行の伴はぬ佛法は大嫌ひじや。

◎私は年來聖徳太子の堂を東京に建立したいと心掛けて居る、既に此様に趣意書がある、私が讀むてみましよう、全体文章でも言語でも言ひ様が大切じや、如何なる御心得に候哉」と聲あらゝげて言へは人を詰責することになるが物柔かに言ふときは人に尋ねることになる。

◎松蔭が寺島忠三郎に與へたる手紙にこうゆうことが書いてある、貴様は人と議論をして勝つことを好むが、議論で勝つたとして人が服するものではない、言ひ負けて人が夫を喜ぶことがあるものかと戒めてある。

◎野村晴が入江和作といふた頃、眞鍋を殺そうとして入罕した時、野村と松蔭との間を品川彌次郎が使となりて往復した、其時松蔭は清朝勅撰の「康濟録」といふ書物を讀めと云ふて持たしてやつた、暫らくして松蔭は野村がどう云ふて居るか品川に尋ねたから「何か、もつと面白い本がほしい」と言ふて居ると答へると松蔭は「和作には分かりそうなものじやがな」と眉を擡あたと云ふことじや。

◎後年品川が内務大輔で、野村が神奈川縣令の時、縣下に稲虫が付きて、仕方がない夫を處置する時に下より書き出した書面の中に康濟録が引きてあつた、野村と品川が、此書物はイッやら先生が讀めと云ふた本でないかと云ふて早速内務の圖書局から其本を借りてみると、獄中で松蔭が借してくれた本であつた、野村は「先生は我々が他日民政に與ることを先見せられて教へて下さつたのであつたか」と言ふて品川と共に泣いたそうじや。

◎松蔭は獄中でも他の囚人に敎の事を話したら、大に感じて頻りに敎を請ふた、ソコで松蔭が「御互に何時が知れぬ運命でないか」と云ふたら、セメテ死ぬるまでに人間になりて死にたい」と答へたと云ふことを書いてあるが實に味がある。

◎松蔭が首を斬られた時、夫を受取りに行つたのは木戸と伊藤じやが、伊藤もマサカの時には血の滴つた先生の頭を持つ

◎太子堂のことを言へは、古、日本には到る處にあつたものと見へて澤山太子堂村と云ふ村名がある、東京では淺草の松山町に用明山四天王院聖徳寺と云ふ寺がある、なんと立派な名ではないか、鎮西の聖光上人が關東化益の時御供せられた太子様じや其隣の寺にも太子堂があつたが、私の尋ねた時は物置になつてあつた、前のは有名なものじやが隣のも古きものと見えて「江戸砂子」にも出てある。

◎オ、ソレソレ昨年、國會解散の日に佐久間象山のナボレオンの詩を書いた、御覽に入れやう、吟じて御覽「何國何代無英雄、平生欽慕波利翁、邇來杜門讀遺傳、忽々不識年歲窮……終卷五洲歸皇朝、皇朝永爲五洲宗」何んとよいじやないか。

◎全体佐久間といふ男は英雄肌の仁で、常に妾を二人蓄へて、互に悪口を言はせて、其缺點を知りて、能く操縦したそうじや、そうゆう遣り方であるから變死したのも無理はない、吉田松蔭になると丸て違ふ、世間では「之子有靈骨」の詩があるから吉田が敎でも受けた様に思ふて居るが夫は違ふ。

◎全体松蔭が松下村塾を開いて居つたのは何年間と思ひなされる、僅かに三年じや、敎育といふものはエライものじや其門から木戸も出た、山縣、伊藤、井上、品川も出た、ソレも皆同じ松本村の人じや。

◎松蔭は書生に對して親切な人で、必ず書生に書物を對讀してやつたと云ふことじや、「産語」を對讀して感心したことを自ら書いて居る、「産語」は古人の書の様に作つてあるが、實は大宰春臺の作じや。

て歸つたことを思ひ出すであらう。

◎私は松蔭と同國であるが、當時名だけは聞きて居たれと狂人と思ふて遇ひもせなんだ、後、明治になつてから松蔭の兄の杉梅太郎といふ人と極入魂になつた、夫から聞いた此人は民政に上手な人で藩知事から民治といふ名を貰ふた、又松蔭の母にも遇ふた。

◎寅次郎の精神が貫徹して明治王政の盛なることをセメテ母親に見せてやりたい、又自分の子か松蔭神社に祭られ居るのも見せてやりたいと思ふて、蒲原明禪に話し旅費まで用意して國から呼び寄せやうとしたら、残念なことには中風になつてダメであつた、其後死なれたが兄はまだ國に居る、宮内省にても御奉公させたらばよからうと云へど古の門下生は兄か來ると松蔭の名を汚すと考へて居るらしい、馬鹿な、若し松蔭の幽霊が出て來たら面目がない人間ばかりだらう。

◎天下の人材と云ふものは一朝にして得られるものではない、眞の愛國の士と云ふものは平生に於て其心掛を爲して居る、宋の揚誠齋は時の宰相から天下の人材を聞かれたら早速即席で筆をとりて書き出したのが、「薦名録」じや、又「千慮策」といふものも書いてある、是非讀むて置くべき本じや、其内に御覽に入れやう。

野に出て何所ともなく尋ねれば

雪とは花の見ゆるなりけり

懺悔

百目木 劍 虹

吾はたゞ地に投じて、求哀懺悔あるのみである。何故に吾は今の今まで懺悔せずに居つたのであらう。いふまでもない、懺悔することを知らなかつたのである。適切に云へば自覺の域に達しなかつた。今は懺悔せざらむとするも、自ら懺悔せずに居られぬのである。實に過去の行程を顧みると、身の毛よだつ程懺悔の念が胸に溢れて五體を投して地に泣き叫ぶのである。せまき胸をば我の天地として煩惱の火燭をば焦しつゝ、殆ど他を顧みる邊なく、父を焼き、母を焼き、兄弟を焼き、朋友を焼き、善心を焼き、法財をも焼いて、焼き盡くし、獨り悶々苦み、獨り惱み煩ひて、吾は殆ど絶體絶命の窮境に沈むだ。

窮して一條の活路が開かる、吾は始めて自己の頼むべからざるを知り、自身の淺ましきを感じたのである。即ち自己の本心に立ち歸へたのである。自己の本心に歸ると共に、自己の罪惡に氣が付いたのである。一たび自己の罪惡を自覺すると共に、絶對無限の慈悲の力に憑りすからざるを得なかつた。舵を失ふた船が救ひを求むるの聲を發するが如く、吾は慈悲の懷に入りて泣きつゝ懺悔せざるを得なかつた。改むるに憚るなかれとは古聖の舊き教であるが、之を遠く眺めて居つた爲に自分の身の上には氣が付かなかつた。吾は一たび懺悔の涙に咽ぶときは、靈光胸に輝きて迷の雲は晴れ、全身爽かにし

上に就て考ふるも、精神作用は不思議にも感應するものであつた。況して宇宙の大靈にありては猶更挙動せざるの筈がない。

世の人稍もすれば宇宙の大靈を解せずと云ふものがある。

こは未だ眞に自覺の域に達せず、人生の眞意義を悟らざる人の云ふことである。人生の事一として豫期し得べき者ではなし。今日の事固より明日を測りかたきは吾々の状態である。三界は皆苦なりと釋尊の渴破したるか如く、實際吾等は悲みなき生涯を送るとが出来ぬ。必ず吾等のより立つべき住家を見出さねばならぬ。若し宇宙の疑問を解せぬ人あらば、吾等は教へるであらう。唯神は善良なりと感ずる其人によりて了解せらるゝと泰西の人の云ひし如く、吾等も云ふであらう。唯佛は慈悲なりと感ずる其人によりて始めて疑問は了解せらるゝなりと。人として恐く慈悲の雨に濡ほされざるものはなからふ。天の雨は草木を濕し、土壤を濕すではないか。況してや慈悲の雨である。衆生を融化せざるは止まむのである。慈悲の雨に浴するもの満身懺悔の念を捧げて、求哀して身を投ぜざるを得ないのである。吾等は唯懺悔あるのみ、唯懺悔によりて佛陀の生命は得らるのである。信念の地盤は築かるゝのである。善導大師は念々稱名して常に懺悔すと云はれたのも、親鸞上人が耻づべし傷むべしと懺悔せられたのも、吾等に取

りては千古生きつゝある殿びしと教訓である。一たび懺悔して他力の名號を唱ふれば、一切の迷執を離れ、闇去明來、大悲の光は照々として我等の胸に宿り、身は靜に温たかき照護の光りに包まれ、聽て永久の春は復り來て、常住の花は長へに微笑むのである。

て蘇生の氣持がする。今まで小さき胸の天地に踞踏して妄念妄想の雜草が蔓びどりつゝあつたが、自己の罪惡をさらけ出すと共にこゝに新天地が眼前にあらはれ來て、悠々たる白雲靜に青山の上を舞ふやうになつた。勿論吾等は罪惡の吾である。曾て十年前に受けたる傷は依然として痕跡を存すると同じく、例へ小惡とは云ひながら、一たび冑したる以上は如何に悔み叫ぶとも、幾年幾歳を経過したりとて罪は消ゆべくもあらぬ。唯佛陀の慈悲は洋々として汲めども盡きざる大海の如く吾等を攝取するのである。彌陀弘誓の願船は煩惱具足の吾等に其の儘乗托を許すのである。吾等は罪の淺深を詮索するに及ばぬ、無始の永劫より罪の子である。惱の子である。合掌して佛陀の慈悲をたゞへつる、其手を舉げて他人の頭を打擲する吾等である。右手で慈善を行ひ、左手で不倫をなす吾等である。口で親しみ、心で怨に思ふ吾等である。されど佛陀の眼に映じ玉ふ衆生は凡て恩怨一如、敵もなく味方もなく一切平等である。佛陀は十劫の正覺より、吾等を迎へんとて常に温かき慈哀をたゞへつゝ、接近し玉ふも、吾等は自らの罪障によりて城壁を高くして千里の遠きまで隔たてんとするのである。けれども一旦自己の城壁を徹して胸に張りつめたる懺悔の聲によりて、大靈は吾等の身に降り吾等の心を淨め、吾等を安するのである。乃ち吾等は此儘救濟せられたのである。懺悔の念が生じたのは乃ち佛の御聲が聞えたのである。佛の慈悲が涵み渡りたのである。懺悔は佛の命令なり。佛の召喚である。唯漫然として佛を念し、佛を稱せばとて、いかで宇宙の大靈に觸れて反響の傳はるべきものではない。之を人事

信仰問題

予が信仰に關する

質疑に答ふ

近角 常觀

佐崎幸君は長野縣下水内郡岡山村の人、一昨年の夏、道を求むる爲め、遠く都を離れて東京せらる。其態度頗る眞摯實に熱誠の人也。予此時を以て君と相知る。然れども君は予が信仰に就きて特に注意を拂はれ。信仰之餘濫出版以前に於て、政教時報より諍論を懸念し、之を座右に供へ給ひしと云ふ。洵に君は予が信仰に於ける最大知己なりと謂ふべき也。昨夏、北陸傳道の後君を其郷に訪ふ。君は實に飯山附近に於ける信仰の中心也。昨年十一月書を裁し、特に三問題を提起して予が信仰に就て疑を質たさる。人事勿々其答を作らずして年既に暮る。今誌上胸臆を披瀝して君が知己の情に酬ひ、併せて世上同信の人に示すと云爾。

一、所信所歸の客體

(一)佛は血あり、涙ある個人性の御方なり。(信仰之餘 濫冊二頁)
 始めありて終なき因願酬報の佛陀なり。(信仰之餘 濫冊四頁)
 佛陀の始めは吾人の如き人間である。慈善心が本となりて因果律によりて不知不識佛陀になつたのである。(信仰之餘 濫冊九十六頁)
 是等の御示によれば大經の法藏の發願修行、彌陀の十劫成道等の記事を殆ど歴史的事實と等しく信認

し玉ふこと、存候。果して然ることに候哉。私共も青年諸君の如く、先輩大家達の如く宇宙の本體をば表號的の擬人論を以てして阿彌陀佛なりと云へる解明には満足致しかね候ものに候。世間の多數が如此思想を有せる間に立ちて獨り先生のみ人間の佛陀を示し玉ふこと如何にも隨喜の念に不堪候。去りながら如何にして先生には如此思想を結び得られ候や。吾等は此點に於て實に知と信との衝突を感じ困入候。何卒先生が如此思想を結ばれ候心的經過を御洩らし玉はり度候。

(一)人生上に於て實驗されたる釋尊は僅に其面影に過ぎないので猶一層大なる形式を以て、より大なる力を以て人類の上に偉大なる救濟を下し玉へる釋尊のその如くである云々。(政教時報八) 釋尊の歴史を透して佛陀の像を伺ふがよい(信仰之餘瀝)

是等の御示しに接して如何に釋尊を透して彌陀佛を伺ふべきかを指示し玉はり度候。若し我等が佛陀の救濟を戴さし如く、釋尊も同様にましますと云ふの比論ならば、釋尊も他方本願の救濟によりて成道し玉へりと云ふことなるべし。若し然らば原始佛教史上に於て(即ち現存の史料によりて)如此認定し得べき證左有之義に候哉同度候。

剗切痒を搔くが如き御尋を辱うし深く感動致候。可成簡潔に且つ了解し易きやう順序に御答可申候。

(一)仰に従ひ私が如此信仰に達したる心的經過を有躰に申上候へば、信仰之餘瀝第三版の自序にも申述べ候通り、明治三十年二月より十月まで非常なる煩悶に陥り其後精神の快瀾なると同時に初めて佛陀の御慈悲が身に泌みわたるが如く感ぜられ候。其有様は如何にも信心歡喜と云へる文句にあらはるゝ如く、何となく身も心も嬉しく見るもの聞くもの喜びの種ならぬはなき有様に候。其後數月を経て強いて之を文字にあらはし秩序立てたるが信仰之餘瀝第一章宗教的同朋なる一篇に御座候。而し彼文字すらも不肖の心的經過の實際よりは、より多く秩序を立て過ぎたるやう相感じ申候。こは他人に説明せんと欲するが爲め、自然かく相成候次第に御座候。其實感を告白すれば久しき苦悶中に於ける罪惡觀は實に極端なるものにして、大經第五惡段の文を拜讀して一言一句自分の境遇を書きたるもの、やうに感して、震ひ上るやうに恐しく相成候事に尙記應する所に候。如此内心暗黒のとき先づ身體上の病氣本復して、次に精神上に佛陀慈悲の光明を感じ來りたる時は何の理屈もなく嬉しき斗りに有之候。政教時報第七號社説信仰論中に引用したる阿闍世苦悶の事實の如きは私に取りては決して他人の事とは思はれ不申候。況や佛月愛三昧に入りて光を放ち闍王の身の病を治し、而して心に及ぶと云

へる文を見たる時は不覺感謝の涙に咽び申候。如此有様を以て佛陀の信仰に達し候次第につき、表號的擬人論と云へるか如き氣樂千萬なるものにては毛頭無之、また宇宙の本體などとは思想上何等の關係無之候。如此慈悲の佛陀を感じたる以上は自然の結果として其佛陀救濟の根本的事實にして且つ慈愛の精神の發動たる大經所説の彌陀の本願は何の滯りもなく、よく私の胸中に落ち入り申候。親鸞聖人が彌陀の五劫思惟の願をよく案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそこばくの業をもちける身に於てありけるをたすけむとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと云へる御述懐を承るときは、最も親しく私の心を言ひ破りて下されたるやうに思はれ候。故に仰の如く深く事實と信じ居り候。されど其事實は佛陀の不可思議なる救濟的事實に候へば、敢て歴史と云へば云はれざるにはあらざるも、何れの時、何れの處なりしやなど云へる詮索的思想は毫も雜り來らず候。從て御嘆きの如き知と信との衝突は一切無之候。唯一言御斷り申さるべからざる事は、御引用に相成し信仰之餘瀝第六章佛の人格及び第十四章佛陀を近に求めよの二篇の如きは、慥にあまり思想を秩序立てんと欲して少々理屈に渡り過ぎたる如きは有之候。要するに佛陀の佛陀たる救濟の眞面目は、報身にして其救濟の力は本願に於てあらはされてあると云ふ以上は、あまり深く理屈を申す必要なく候、たゞ佛智の不思議と

信ずる以上は研究の手の達する筈も無之、亦必要もこれなしと存候。親鸞聖人が晩年殊に義なきを義とすと信知せよと云へる御教導は、最も味ひ盡さざる金言と鑽仰仕居候。

(二)私が信仰上の客體としては、毫も釋尊と何等の關係無之候。唯慈悲の佛陀と云へる感じのみ有之候。名を以て云へば勿論阿彌陀佛に御座候。併し明らかに白狀致し候へば其阿彌陀佛なる思想は決して他の佛陀を否認して此佛たらざるべからずと云へる彼此隔歴的思想に基くものにては無之、たゞ佛陀救濟的事實の中心を阿彌陀佛と云へる名稱を以て云ひあらはされたるかの如き感有之候。故に此佛の中には一切の諸佛菩薩が皆包含されてあるが如く感じ申候。故に信仰の對象としては絶對唯一の彌陀佛を信ずるのみなれども、其彌陀佛中には勿論釋迦佛も含まれたるものと存候。此に至りて親鸞聖人が佛と云へば彌陀一佛に限りて而も釋迦彌陀二尊の一致を説かれたるは味ひ深き事と存候。故に私は釋迦佛を以て彌陀佛の伽耶城に應現したまへる事實と確信致候。かく私には佛陀の名の下に彌陀と釋迦と同一體になるものなれば、御想像の如き釋尊が彌陀の他方救濟の本願によりて成道し玉へると云へるが如き思想は無之候。詳言すれば釋迦を吾々信者と同一列に置かずして寧ろ彌陀佛と同一列に置く候。以上は是信仰の有様を有體に開陳致候次第に御座候。然るに私は未だ佛教を知らざる人に佛教を説かんとするには先づ

佛陀の概念を興へざるべからず、佛陀の概念を興へんと欲すれば、歴史上の釋迦佛の實験を説かざるべからず。此に於て先づ釋迦佛を説いて而して彌陀佛に説き及さんと欲する次第に候。これ乃ち御質問中引用されたる文句の上にはあらはれたる思想に候。乃ち信仰上に於ては彌陀佛が此世にあらはれ來りたるが釋迦佛なりと云ひて、奥より前へ引き出したるやうに感ぜられ候得共。他に説くにあたりては先づ釋迦佛を説きて之が奥に引き込みて一層大なる形式となりて居られ候が彌陀佛なりと申たる次第に候。故に釋尊を稱して彌陀佛の佛なりと説く所以に候。殊に釋尊の歴史の上に彌陀の佛を見るといふとは實は法藏比丘出家の事實即ち國を棄て王を捐て行して沙門となると云へるとは釋尊出家の事實と如何にもよく類似致し居り、又五劫の思惟と永劫の修行によりて成道し玉ひたることも釋尊の成道に大体に於て類似致し居候。而して釋尊の事實は人生問題の解結、涅槃大覺の實験としては世人に了解し易きを以て釋尊を説きて其歴史を透して彌陀佛に説き及さんと企てたる次第に候。併しこれ未だ佛敎を知らざる人に向て、佛敎を説明するには適當なる順序とは存候得共、人に直に信仰を得せしめんとするには、自己の信仰を得たる順序によりて、實感を以て他に説くことが最も必要なる要件と自覺致候。如此時は釋尊に關係なくして短刀直入彌陀佛の慈悲を説くこと、生ける敎導と存申候。(第一問題終)

風尚餘韻

かの夜

波岡 茂

人生てふ大問題を捕捉し來りて、いとけなき臆なる小さき瞳子に、陰繪の如く、すかし見て思ひ煩ひしかの夜！あゝ六とせの往昔のかの夜を追懐すれば、小暗さ森に陥み迷ひたる真夜中、けたたましき聲して、怪鳥の頭を掠めて、飛び行くに、耳を蔽ひ、呼吸を殺して、地に俯し、凄愴なる感にうたれたらん如く、悚然として身戦き、神萎ゆる事屢々なり。かの夜の、沸き騒ぐ熱き血潮、吾が心の緒琴の細き幾條の絃に觸れて、強く／＼響ける激越の調べの數々、潤色なき幼き筆にのりて、手帳の端に記されて残れり。かくもいみじき、空恐ろしき想の如何なれば、思ひ泛びしかは、今日も手帳緋き、かの條りに讀み至る毎に想起る懷疑の雲なり。されどかの夜の思想の當れるや否やは、今も氷解する機なく、冥想一番此問題に思を凝らす毎に、徒らに其より其と迷宮の入り亂れたる路を辿り行き、はては黝闇なる、重き雲に捲き込まれ、再び遁れ出でん術もなき思ひせらるゝなり。

……「宿命！之れ實に天地萬衆の避くべからざる、傀儡の糸にして、天地自然の勢なり。思ふに天下の事、避くべからざるの外に出で、消長する事能はず。向上といひ退化といふ必竟するに傀儡師の糸の引き加減にあるのみ。かくて世界萬衆皆森然の次序を保持して今日あるを得るなり。若し妄りに其一絲毫たも移易し得たりとせんか。井然たる世界の大次序爲めに攪亂せんのみ。

大雨連日、洪水汎濫せんか。凡庸之を見て嗚呼大雨なかりせば災害茲に至らざるべきにと歎ぜん。然れとも思へ。是れ避くべからざるの理によりて、然るのみ。天地の大序實に茲に存す。

嚮きに吾自在にして且躬ら事を斷するの力ありと信ぜり。之れ實に偏見のみ。謬見のみ。吾か心の吾か行爲を支配し得るは大海の一葉舟をやるにだも及はざるなり。而も仔細に觀じ來れば、一葉舟を動かすだに吾か自在にする事能はざる所なり。或は西せんか或は東せんかに迷ふに當り、其目的の強きに牽制せられて、僅かに其去執を決し、弱きを捨つるなり。之れ避くべからざるの理に服し、天地自然の勢にあやつられたるに非ずして何んぞや。然り、強に牽制せられて事を決す。而も其強きは果して向上なるか、退化なりや。吾れ之れを知らず。善か悪か、はた美か醜か、吾又之れを辨せず。吾か行く處、所謂善なるも、將た悪なるも、美醜進退の孰れたるを諮はず、避くべからざるの理によりて到るのみ。動かすべからざる宿命によりて赴くのみ。かの酒色に荒み、無頼に極め、兇頑暴戾至らざるなきも、又黄白に眩し、榮譽に泥む等元より稱すべきにあらざれとも、亦敢て惡むべきにあらざり。奪強迫以て明法を犯し、峻刑に

處せらるゝも、亦恤むべきにあらざり。吾元よりかくすればかくせらるゝを知りつゝも而も敢えて犯す。共に避くべからざるの地に立ちて然るのみ。又哲人君子の身を修め、學を勵み、以て完備の域に入らんとを求むる必ずしも褒むべきに非ざるなり。移易すべからざるの理の然らしむる所なればなり。……

録して茲に至れば、光明の吾を導くものなく、希望の吾を勵ますなく、只闇さ／＼奈落の底に墜落して、懊惱煩悶の雨に浴せかけられ、縋るべき繩もなく、指して行くべき當てもなく、空しく五里霧中に彷徨するのみ。冷汗脊に滴り、血の色纏せて、妖魔の毒手に醜弄せられ、咒咀の征矢に射貫せられたる思ひして、筆を打ち、呆然たる事稍々久し。

夜色沈々、萬類聲を呑み、夜もいたく更け涉りて、時に裏山の雜木林を踰ぶる風の音ビュー／＼として、暮地に吾か肺腑にせまり、闇憐の色、吾か狭き書齋を罩め、凄愴の氣愈募る。消えなんとして微かに燃ゆる淡き孤燈チリ／＼と音して燒きつく。眼は漸く暗み行き、例へば泥深き沼に一步一步沈み行き。あはや總身沈み畢らん如く覺えて、眼は明らかに見張れども一物の影だに映づるものなし。只寂寞に沈み行くのみ。ふと瞳子をこらせば障子にうつる老杉の影、訝え渡るのみ空には、廿日有の月影利鎌よりも寒く澄みぬらし。庭面の落葉婆娑と音して雨戸をうつ頻りなり。

あゝ、此切なる惱みの深淵より、温き大なる御手をさしのべて、吾を寂しき浪路の外に、立たしめ給ひ、光明のさす方に導き給ふべきは、日頃幼き吾か爲めに掬育の鞭ふり給ふ、一人の

若き聖の在すのみ。然なり、驅け起きて、彼の御僧の住み給ふ山寺を叩きて、此苦悶を訴へんか。此悲愁を裂き分ちて、吾か負荷を輕からしめんか。我は今や他に詮すべを知らず、急き訪ねんとて立ち上るに、次の室にて眠けの時辰儀、音も緩やかに十二を點ぜり。あゝ此真夜中に家人を騒かし、師を驚かすなめげなる仕業の心苦しさに、本意なくも思ひ斷ち、薄團深く被ぶりて、強ひて思ひ沈め、睡らんと枕につくに、眼愈々冴ぬ初め、幻想は徒らに先より先にもつれ行くのみ。……吾か觀する所をして眞なりとせば、果して如何に？世は常暗みの阿修羅場と化し、悲み哭ふ百鬼の巻と易り、苦しみ悞ゆる焦熱地獄と變ぜん。あゝ此紛亂混沌の世界、思ひやるだに怖ろし。吾見謬り。斯くて世は成るべきにあらず。光明赫灼の世、瑠璃淨光の世、誰か渴仰せざらんや。げに我か見誤り。……漸く悞惱の烈しき火の子、鎮らんとしては又盛かんに、かくする再四、はれ再び迷夢の中を迫るなり。人間萬事不如意、欲するか儘に得らるゝもの、果して幾何かある、却つて既に捨てたる寒翁が馬に嗟嘆の吐息を漏もの多し彼れに執し之れに泥む。實に執念は煩惱なり。善執着すべからず。惡亦元より然り。強いて善ならんとし、強いて惡ならんとす之れ共に迷ひのみ。善惡兩ながら避くべからざるに出づ。かくて吾は再び先の思ひを繰り返し、羸ち得たるは迷ひの雲、迫り着きたるは迷雲の門。あゝかくて遂に吾は謬見の謬見たる所以を悟る能はざるなり。然り世にたよるべく光明なく、果すへき希望とてもあるべからず、と觀し來れば、胸中自ら浩濶無礎。光風霽月洒然の思ひあり。八萬四千の迷雲悉く散じ盡し、

岸に轉ず。そのさま伸べた事玉に光あり、白き蛇などの青き草のうへ匍ふに肖たり。今、稻村が崎は黒く淡く海上に歩み左手の海角獨り靜かに眠る。

由比が濱邊の月夜はえも云はれずよし。遠く目を放てば淡靄横糊、深玄の色の秘む。近く足下に省みれば、沙濱をばなめ盡したる波の宿す月影、人は歩むともなく歩み、われ亦從ふ。此の良夜、此の無幻の色、われ何をか思ふ。われは見得んかぞり見んと勉めぬ。見たるは何ぞ。われは何物をか聞かんと希へぬ。その云ふ所は何ぞ。今や海はこの色この音を以て人に謎語を供しぬ。煩悶か斯る大なるもの、煩ひとして其の聲小に過ぎずや。微笑か、月を帯びて淋さ云はん方なし。畫家に品題を興へたるにや、色彩の按排に難き、到底其の料にも當らざらんか。結局、われの愚なる、長へに公然の秘密として止るべし。しかも波はよせては返し、束の間も忘れず、月は影を碎きて獨り天上に澄む。境寂然もし暮鐘峰をわたりて來り、笛聲波間に起るあらんには、其の謎語はいよ、解き難からむなり。われ歩をとめず、遂に滑川に極まる、佇立低徊、ゆかしき念は油然として起りぬ。

由比濱の水、こはわが故里の波にてあらざるか。今宵、月あかさ夜、同じく一灣の眞砂白く、恍たる風光に著き松の調、斷續として哀々の樂をや奏すらむ。われ幼くして、故里に住むこと長からざりしかば、月の夜そこに立ち盡したるはなしと雖も、親しき弟妹と共に嬉戯せし、樂しかりける其の日の様は、中々に此の夜にも偲ばるゝ。破れ舟のうへ、沙軟さまゝ飛回り跳返り、今羅漢の漁夫にさいなまれたる、あるは漁

玲瓏乎として、微塵の汚すなく、腰に交じはる冷き重き鐵鎖頓に斷じて、天馬に駕し六合に翱翔するかとも思はる。頭をもたぐれば、我が書齋の四圍の壁障子頓に撤し去りて、華かなる燃ゆるが如き靈光、いみじく閃めきて吾か渾身を包み、芬芳たる百花爛熳として嬌を競ひ、艶を誇る。姿見えされども、囀る百千鳥の、清き爽やかなる聲、啾啾としてさながら黄金の鈴を振るに似たり。東を見れば若梅の直なる枝に、あかしく朝日子のかゝりて、得もいはれざる眺めなり。

「ゆら／＼と梅に朝日の心かな。……未だ俳句を知らざりし吾は、吾を忘れて口號みぬ。夢乎！夢乎！露まどろまざりしなり。嗚呼此一瞬間にかけて、天堂に遊べるを、今尙固く信ぜり。其樂しかりし事、其嬉しかりし事吾か生涯の初めの十數年間に知らざりし所にして、其後の六年の間にも亦知らざりし所なり。今宵、古き手帳を繰りて、此條りの手すさみを讀み來り讀み去るに、かの夜の有りし事共思ひ出でられ、さながら再び眼前に見るが如し。はてははてしなき人生の問題に思ひ亂るゝと共に、かの嬉しき思を再びするなり。嗚呼此感興のやがて消ゆべき機のありやなしや。

潮聲錄

天 都 城

由井濱の月夜

由比濱に逍遙す。月隈なく照りわたる。波は遠くより寄せて多き暖き日、松の下蔭、團樂の集ひげに旨かりしことなど、今は幻ろしに浮み出で、つね思はざりし、否、古き印象の芽は春の暖きに思ふがまゝに生ひ出でつ。月皓々、滑川は音さへ立てず、海の懷に忍び入る。

月の光は弱きかな、弱きは月の光かな、さなり、われは其俤に見、思ひわが濱邊より轉じ、しかも百尺直下の勢、わが母の愛に及ぶ。わが母の目はこの月の如くにあらざるか、嘗てわが頑なる性は常に其の目に融けにき。母は涙をもて見涙を以て云ふ。いま膝下を離れて、身は遊子の境、而かも母の愛は益々切なり。オ、此の清き夜慈母はいかにかせし。われに明月ありて母と共に居らず、殘感交々湧き來り、われに翼あらば、波に心あらば、ア、悲しきはかゝるときもの思ひなり。それよ今宵は除夜なんめれ。去にし年、弟他に去り、一家の團樂何となく淋しと、母の啣れたるに、今年われ其の座になくして母は何の感をやなすらん。げに歸らざるは罪なりき。われは北の空を仰ぎ、潜かに月を猜みぬ。かくして團樂のさまは書けるやふ、父の言手にとるやふ妹の喜び眉宇にあり。しかも縛累深くして、天涯の一角にはぐれ鳥、われ自ら招きてわれ恨む。人の物思はなべてかくの如きなり。月松より高く、山の裾淡ゆし。

七里が濱の富士

海濱の漫歩は春こそよからまし、夏こそあかしからめ、かくばかり木枯の吹き荒びては、彼我の交會も疎ましく、歡興を起すこと多からざまし。さるにても富士の偉容よ、芙蓉の如しと云はゞ唯優婉の一面を説くに過ぎざらむ。白扇倒にかゝるとなさば瑰奇にして秀拔、凜として白雪を被り、駿乎とし

て温容ある觀を浮ぶることなくして已まむ。

今、正さに垂天の雲富士の頂近くにかゝり雲の翼湖南半島を被ふ。われは此の景を趨ひ、夕日の西に迫るを凝めつゝ、長く七里が濱邊を傳ふ。それ前に淡きは龍宮城の江の島なめり。空に紫雲の天蓋を欠けど、天空一碧、蒼海汪洋、必ず辨才天の在ますべき所とうち尊まる。うしろに三浦半島、隠滅の間そこはかとなく霞みわたり、海祿漫として涯をなすところ大島の佇む。

此の風光に對し重かりし頭はかい消つやう、復び舊の如し。風露は衣を吹かば吹け、砂粒手面を目蒐け打たば打て。此の障得の如きは、富士と呼吸の逢へる我に何するものぞ、富士は眞人なり、深く踵より息す、われ其の氣を受けて懐しく爾の姿に慍慍す。海や憤怒の相を現はし、月や哀憫の目をあぐるとき、冷凜滞る所なく、莞爾として宏懷なるは爾なり。惱に疲れ生に倦じ、四大やるに所なきとき慰籍を與ふるに吝ならざるは寔や爾なり。ある夜われ思に亂れて夢に爾の清容を見しとき、醒めて後いかに我が心跳りしかよ。げに爾はわれにとりて土塊にあらざるなり。死物にあらざるなり。世に爾の美を稱ふるあり、われそれのみを以て足れりとするを得ず、高きを喜ぶものあり、われはそれ以上他の意味なしと云ふを得ず。同情の塊なり、力の現れなり、自然の靈なり。されば爾に對し致すべきはたゞ默禱のみ、弱き目にてうち仰ぐのみ。永久の記號、美の表顯、略ぼそれ爾に於て盡く。浮游其の日も果敢なき肉骸を抱き、しばしも忘れ難きは、永久の生命、聽て爾の命にあらずとせんや。

提督の偉功を頌す、極端さ中腐さの利害、國民の義務を論ず、同胞相愛と英雄的狂悖、品性と成切の九章にして、獨り議論の痛快を覺ゆるのみならず、眞にルーマベルト其人に接し品性の崇高に打たるの感あり。青年階級の一般に一讀すべき良書也(定價三十五錢)

文學博士井上圓了著

西航日録

小石川 鷄 聲 堂

本書は著者の歐米遊日録にして、輕妙の筆を以てよく泰西の文物習慣を詳細に描寫したるもの、眞に實情を盡くして遺憾なしと云ふべし。殊に著者再度の漫遊なるを以て、觀察の精緻なるは自ら他と異なるものあり(三十錢)

小波 編

魔法學校

東京 博文 館

世界は幽暗の五十三編として出てたるもの、嚙馬の御伽噺を譯せるもの、例によりて興味此上なし。(八錢)

青柳有美著

續有美臭

東京 文 明 堂

著者曰く奇に街ふて之を得たるものにあらず、有美を自して奇を街ふと云ふもの、我れ其意を解するに苦むと。此一言以て本書を許すべき也。(廿五錢)

濱口惠璋著

青年の宗教

同 上

始めて宗教の門に入りむとする人には、本書は最も適切なる説き方と云ふべし。宗教の撰擇を説き、信仰の必要を述べ、吾人と佛陀の關係を論ずる等一として求道者の要求に適せざるはなし。殊に宗教の術語を多く用ひざる爲め、何人にもよく了解するを得る極めて得難き良書也。(四十錢)

宗教と自然美

東京 政教青年會

原著は露國神科大學刊行雜誌より採萃して、一卷とせざるものより譯したるものにして、宗教と自然美を語ひたるもの、試に其美はしき聲の一部をかきかひかな我等が流れを急ぐは、地の有らゆる不淨を洗はんとてぞ、又有らゆる地を經廻るは、人が遣せし一切の不潔を洗ひ集めて之を天の父の公義の聲より遠早くも海の淵に隠さんとしてぞ、さばれ我等が凡ての勞は、おん身等の助けなくば甲斐なきものなるぞ、うは傷める心より出づる悔改めの涙の一滴は、テール及びエフラー河の有らゆる水よりも尚強ければなり。

江の島に到れる比、富士の頂一點の雲をとめず。淡き姿雲表にいよ、高し。突兀たる函根の山々其足下に伏して、今、大王の鼻息を伺ふ。大王のいふ所、帝國主義にあらず、まして人道を蔑みせる侵略術にあらず、かれ適者生存を眞甲にふりかざし、弱肉強食を標榜するものに教へて云ふ、其の説くところ誤れりと、權謀、術數、隱險、陷擠、猜忌に馴れたるに示して曰く、わが姿を見よと。われ初めて平和の喧傳者を富士に於て見たり。遮莫海はこの鼓吹に聽かざること提婆の如し、風も亦海を助け、戦へ大に戦へと狂ふ。われ其の介に立ち肉振ひ、骨動き、寒さ衷心より感じぬ。斯くてわれらは江の島に渡るべき橋に立てるなりき。あはれ、いま、今日の日も殘紅微かに西の空に入らんとすなり。朝跳躍して日を迎ひ、夕恨は長く之を送る、悠忽として五十年、また夢に似たるか、この日の沈むごと、われも亦沈まざるべからざるか、われに煩惱の多きを咎むる勿れ、靈魂の不滅を説く勿れ、この世はこの世にして味あり。われは弊履の如く捨て難きや。されど富士の貌は永劫にわたる。(日記のうちより)

新刊紹介

奮闘的生活

東京 成功雜誌社

本書は米國現大統領ルーマベルトの原著を譯したるものにして、蓋し奮闘逸樂徒らに無事な喜ぶ生活は皆大事を成し遂ぐべき希望と能力とを缺くより生ずるは本書の初めに見えたる警句にして、世は昏濁にして、人は優柔なる現代にありては、本書の如何に世道人心に裨益を興ふるやば敢ていふを待たざる也。本書説く所奮闘的生活、戦争と平和、米國民の典型グラント將軍、公人の嚴戒、サウエー

政教時報

昨年の日曜講話の概況

求道の機運著しく勃興したることは、今更繰返すの必要なかるべし。而も其道に入る態度や、眞摯にして眞面目也。熱誠にして切實也。求めて得ずんば止まざるの覺悟、自ら眉宇の間にあらはる。宗教は個人的也。信仰は内心の叫聲なり。個人的なるか故に眞摯なり。内心の叫聲なるが故に熱誠ならざるべからず。近來青年學生間に於ける、求道の精神儼然として起る、亦偶然にあらざる也。現代の日本は宗教の要不要を問ふにあらずして、如何にして信仰の關門を打ち開き、一道の光明に接すべきかと云ふにあり、而して多くの人は乾燥なる哲學の講究、教理の研鑽の如き理論的説明に飽き、直に信仰の眞髓に体達せんとする最後の問題に觸れつゝある也。此勢を以て推せば國民が大自覺の域にいたらむとする蓋し遠きにあらざるべきを信す。

既往一年間の求道學舎に於ける日曜講話の出席者は、其數決して多しと云ふに非ざるも、何れも熱心に傾聴せざるはなく、共に満足の意を表せざるはなし。ある十數人の如きは一年間に互る講話に一回たり其欠席したる事なきに至りては、蓋し其熱誠尋常にあらざる也。求道學舎の位置や、僻遠にあらざるも亦便利の地にあらざる也。而して現在の場所は頗る集會に不便なりと雖も、毎回の出席者大抵五十人を下らざる也、時としては室外に溢れ入場に差間を生じ、壁を徹して一時の急

に充つるに至る。吾人の求道會館の建設を希望する所以茲にあり。昨年於ける講話の数は夏期を除き凡そ四十回餘也。而して講話に次て毎月一回最終の日曜日をして信仰談話會を催し、各自の實感を遠慮なく披瀝するとし、意を信念の修養に注ぎぬ。内心の苦痛を訴ふるものあり。または信仰の経過を説くものあり。其聲如何にも切にして語る人、聞く人心絃共鳴の憶ひをなすに至る。昨年に於ける談話會数は十回にして、左に出席者の姓名を録せば左の如し。尙此外に洩れたる人多かるべしと思ふ。

近角常觀、和田鼎、百日本智理、多田鼎、渡邊知空、塚原秀峰、東海夫、池田護彦、藤井嘉隆、三井甲之助、葛原運次郎、佐伯正、山田友次郎、島貞彦次郎、泉道雄、梅原兼俊、田邊治一郎、阿刀山命造、宮崎もと、鈴木ため、惠比壽みよし、宮永さだ、山本つる、赤間よれ、越智英代、織田さだ、諸岡たつ、木山十彰、守山政吉、麻波康徳、吉木竹次郎、高橋邦次郎、若槻水滋、清水喜鉄、外垣芳重、上嶋永二郎、垣越時廣、磯兼三、篠原兼司、源祐造、吉岡清光、坂井智學、安藤州一、鳥越順圓、楠龍造、荻野ふさ、池山はる、池山榮吉、池山清子、池山一太郎、池山壽夫、卷内彦二、溪内一恵、福谷祐吉、小原讓、長等周忠、繁原三味、三原玲珠、富井孝始、今井基太郎、上野智恵、天津義人、無漏田秀孝、大脇政國、森清吉、竹中慈元、瀧津交、遠山壽夫、尾上徳門、松原諦二、大谷景雲、林義教、大瀧善八、藤田敬彦、湧島種藏、中島觀淨、豊滿道雲、吉田鹿藏、穴澤清次郎、齋藤徳成、藤野常憲、平山華、安井廣度、佐々木月樵、萩野伸三郎、盛唯信、松村真一郎、前山慧雲、益井岸美、村尾要三、山崎儀一郎、依田豊、大地原誠之、河崎伊作、藤下了義、野尾くに、高島よしゑ、岩井らとせ、安東くい、本多長雄、大久保ふよう、牛澤到、村井清中、多田子規、松下忍誠、高瀬嘉六、今井玉香、田原麻奈、猪爪現照、香西素介、桑門典梅野董、曾我量深、曉島敏、吉木一郎、吉島實藏、奥田正造、岡村利藏、姫田康三、中川直亮、吉田美知、藤岡了淳、窪田誠經、篠原力太郎、南谷勉次郎、河野宣朗、石川萬五郎、青木文三、松尾正哲、渡邊深典、西山榮、玉代勢清雲、平塚龍嗣、松崎伊三郎、畑谷せい、渡邊すみ、比山政代、森岡たか、島岡さゝ

隱講話の旺なること實に驚くべきものあり。本舎の日曜講話の當初は世間にて極めて微々たるものなりしが、昨年一々年間の求道の機運は到處熱火されたるは、兎に角喜ぶべき現象なりと云ふべし。

◎教友會(早稲田大學) 明治三十六年中に於ける早稲田大學教友會の概況左の如し。

▲一月十六日 委員會を早稲田町龍善寺に於て開會當日決議せし要項左の如し

- 一、新年會を催さる事
- 一、會費徴收の方法は各部各科に既定委員の外に臨時委員を囑托し本月中に徴收し終るべき事
- 一、本月の信仰談話會は二十四日の土曜に開く可き事
- 一、會務各係員の専任を左の如く定む

信仰談話會及記録係
渡邊 知空 朝倉 慶友
神田 勝次 樋口 龍縁
講談會係 杉 洗水 岡田 耀賢
會計係

▲一月二十四日午後六時(第二回) 信仰談話會開會(龍善寺) 講師は近角常觀先生にして、その要は過日先生が仙臺第二高等學校道交會に臨み親しく執筆なる状況を自筆して感せられたる事より説き及ばされ適切なる信仰の談あり言々切々吾人の肺腑に徹す談りて會者各自の信仰に關する質疑をなし一々指導を仰く、會者二十六名、九時半散會

▲一月卅一日午後一時(第一回)講話會を本校乙教場に開會す講話會は從來毎會前田慧雲先生を聘して菩薩戒經の講題を開き居りしが今圖已後別に講本を定むる事なく一席講話を依頼することとせり講師は從前の如く前田先生を常任講師とし外に時宜によりて兩三名の碩徳を聘することと定めたり本日の講師は前田慧雲先生(大小乘の區別、齋藤唯信先生、善惡の標準)にして、來飛雲紛々寒威殊に甚しく開會の當時は降雪益々烈しかりき前田師の譯々の講話は一座靜聽心に徹し齋藤師の元氣なる講話は聽者肅然として懺を正し暫く寒の至るを忘る會者五十餘名、三時半散會

ふ、竹尾なつ、宅地ますほ、河口千代の、三宅しづ、窪田茂、布村新、竹中大か、本多辰次郎、野田藤馬、木村すへ、穴水繁勝、中村千代吉、山内計作、那須太郎、三宅くに、熊本捨治、井上以智爲、岡田耀賢、鹿島敬嚴、飯手禮實、佐崎重暉、藤本靜堅、山下清一、谷川更太郎、石川俊慶、關根淨正、萩野あい、平野隆然、中條芳道、井上信翁、野口松榮、平野倉、華園輝應、澁谷曉亮、大平徹、宮崎一郎、渡邊慶治、矢野倉藏、五十嵐英二、松部武司、波岡茂輝、佐々木善親、武田清之助、河野文乘、河東信二、佐谷集、安達大主計、木下磯一、小櫻禮始、小畑久太郎、朝倉曉瑞、住田知見、小島忠見、長澤謙順、本田堅一、池田良因、川村温亮、京極清順、津田正明、安藤現慶、藤原惠寛、小原祐慶、保倉惠明、梅田等、香川健爾、藤井秀道、風尾なつ、大洞政次郎、海野香淨、樋口龍縁、三上道登、倉橋圓融、江部藏圓、山路健之助、若槻道隆、藤井樟枝、切山篤太郎、今井美佐雄、吉澤廣機、開谷法龍、馬場樹心、柴田佳月、無漏田範一、小澤一、原祐次郎、上關とみ、岩根みゑ、江浦つる、木下きくゑ、菊池しげ、安元はつれ、服部たへ、百目木かよ、鈴木卓苗、吉崎淳成、小河滋次郎、立花慈海、藤國芳超、渡部三津治、氏分神立、池田和石、石田慶封、横澤常雄、影山宣衛、時澤研二、袋島三四郎

尙一言すべきは求道學舎に來會せらるゝ人には多くは男子部なりと雖も、女子の方と雖も少なきは三四人、多きは十四五五人の出席を見るとあり。求道の機運は到處萌芽を發せざるはなし、宗教家の責詢に重しといはざるべからず。殊に昨年の十一月より高等女子師範學校、女子大學生の學生を中心として毎月一回信仰談話會を催して、各自の胸襟を披瀝して大に修養に勉めらるゝとなりぬ。固より日淺くして格別報導すべき事にあらずれども、若き婦人の宗教に對する態度亦察すべしにあらざるや。要するに以上は昨年一々年間の求道學舎に於ける大勢に過ぎざる也。而して個人として任意に信仰の道を質したるもの亦少しとせず。此等は精神上大なる苦痛を抱きし人に多かりき。翻て他の方面を見るに土曜講話、日

▲二月七日午後六時 (第三回) 信仰談話會開會(龍善寺)

講師は村上嘉精先生にして先づ先生自家信仰に關する談話あり語氣頗る感あり爲めに専ら一席求道勇猛の念を起さしめらる先生談りて各自質疑を提出して一々先生の指導を請ふ頗るに我教友會信仰談話會は近角先生の切實なる講話を聴くの縁に接し今又村上先生の懇切なる講話を聞くの機に逢ふ本會の前途論に多幸なりと謂ふ可し會者二十四名、九時半散會

▲三月二十一日午後六時 (第四回) 信仰談話會(龍善寺)

講師は近角常觀先生にして、最初先生の談話は吾人信仰を求むるの態度決して形式論容のものにあらずして頗る眞面目なる事を要すと云ふにつきて其例として多くの經文を引證し最も適切に教示せらる談りて各自の質疑心内の披瀝に移る吾人常に事に物に不安の念に堪へざるもの今や縁に隨ひて求道の路に上る勇身眞摯の態度を以てせざる可からず會者三十一名、九時半散會

▲四月十一日 前委員志水文雄君禮讃文五百枚を本會(寄附せらる依りて本會は爾後信仰談話會の時にも之を拜讀するものとせり)

▲五月十六日午後六時 (第五回) 信仰談話會開會(龍善寺)

講師は村上嘉精先生にして、開會に先ちて一席禮讃文を讀み次て先生禮讃文につきてうの大意を説き信仰の談話ありりて各自の實感談非に實問に移る最後に先生は特に一同に左の如き警訓を興へらる
凡う人而が世に處せんとするにば須らく俯仰天地に愧ぢざる精神を養ひ而も常に信仰の立脚地に立たざる可からずと當日は學校試験前のこととて來會者僅に十六名、九時半散會

▲十月三日 本會委員改撰期なるを以て委員會開會(龍善寺)

▲當日決議の要項左の如し。
一、便宜上舊委員の一部を再任し新委員を設くる事
再任者 岡田 耀賢 渡邊 知空 朝倉 慶友 樋口 龍縁
新任者 島田 圓成 高木 契園 東海 夫 藤井 文祐
一、評議員を設くる事
評議員 和原 文太郎君 原 祐道君 辻 同次郎君
桑門 典君 本多 文雄君 佐藤 勇吉君

志水 文雄君

一、大演說會開會の件
▲十月三十一日午後一時 (第二回) 大演說會開會本校大講堂に於て開く

一、開會の辭

一、佛教圖

一、佛教の見地より見たる社會問題

一、何故に宗教は人生に必要な乎

當日参臨者四百有餘名、四時廿分閉會

當日午後六時より半夜月華園に於て新舊兩會員の懇親を計る爲茶話會を開く

講師近角學士出席せられ本日の演題につきての純信仰の方面を説く一座頗る感に打たれ就中新入會者の如き誠意眞摯胸懷苦悶の經過を露ぼして親しく先生の指教を蒙る本會亦一人の熱心なる求道の士を増す本會の慶事之に過ぐるものなし當夜雨天にも係らず來會するもの三十名に及ぶ午後十時散會

▲十一月廿五日午後六時(第六回) 信仰談話會開會(龍善寺)

講師は近角常觀先生にして、講師始一座禮讃文了りて先生之れが大意を述べ、信仰の談に入る次で各自の實驗談及質疑に移る會者二十五名、九時散會

▲十二月九日午後二時 (第三回) 講話會本校高等豫科教室に開會

一、日本佛教の過去現在及未來 加藤 唯 堂先生

一、人生論 齋藤 唯 信先生

聽者二百有餘名、五時散會

▲十二月十二日午後六時(第七回) 信仰談話會開會(龍善寺)

當日近角先生出席の筈なりしが急用の爲京都に赴かれしを以て別に講師を聘せずして開會せし運びなりしも幸ひ求道學舍の百目木智蓮氏の九段第二求道會に參會せられしに逢ひ請ふて今日の講話會に招き近角先生の綴辭觀録を讀む杯して了りて各自自由に談話に移る會者二十名、十時散會

▲教友會特別記事

本會委員岡田耀賢君近頃眞宗信徒設立の九段佛教俱樂部の事を聞き近角先生

講話終りて例により第一學期茶話會を開く。席上我會の沿革に就きて新入會員諸君を紹介する所あり。

兎に角、今回の如く出席者の多數なりしは從來會であらざりし事にて、之れ明に時代精神の影響によるるべし。

▲第二例會(同年十一月五日(木曜日)午後二時半より於西教寺)

講師は文學博士松本文三郎先生にして出席者五十有餘名、信念に就てと云へる題の下に一時間余に亘れる講話あり。其概要を記せば、先づ總ての事をなすには確固たる信念は何人と雖も必要欠くべからざるものにして、其信念を得るには初め疑を以て自ら工夫して其了解を求め、終に動かすべからざる信仰を得るに至りて、遂に大歡喜躍躍の念を生ず、自ら一個の確然不動の力を得て初めて大なる信念を得るに至る云々

▲第三例會(同年十二月四日(金曜日)午後二時半より於西教寺)

講師は文學士秋野仲三郎先生にして學期試業の近づきしこと、校庭に於て攝影などありし爲めとにて出席者至て少なし。乃ち坐談會となり。

先生は先づ我國の造形美術に類はれし信仰の有様より説き、時代の推移と共に信仰の變化せる跡を論じて、信仰と美術との關係を明にし。且つ信仰ある生涯の如何に麗しく確固なるかを説き、進んで現代に於ける各種の方面の事業が徒らに枝葉のみ走りて精神を重んぜざるは、要するに各人に信仰の確立せざるが爲めなりと嘆す。扱くべからざるの信仰あるに非れば大文學大美術は到底産出すべきものに非ざる旨を述べられぬ。興味津々として其盡くる所を知らざりき。多くの欠席者も此有益なる講話を聞くを得ざりしは吾人の密かに憾とする所なり。

▲坐談夜會の記

明治三十六年十月九日、午後六時より、其第一回を藤川町の求道學舍に於て開く。出席者二十一名。何れも豫定の時間よりも前に

ヒシ／＼とつめかけた。やがて、先生(近角師)が來られると、今迄、アチアチでもコチアチでも話して居たものが、一齊に先生の膝の周圍に並んだ。新學期の初めてあるから、大体其方針などを、先生から話して頂いて、偕て其後は、質疑や應答やら、又は心靈上の從來の經驗を述べるものもあれば、宗教の門に入る様に

に對する此事を以てす先生直ちに同所に於て第二求道會講話を毎土曜日に開く事に決せらるる同所は元岡田君の知己なるを以て猶且右の如き學を賛し快く承諾せられたり是に於てか名づけて第二求道會と稱す爾後毎土曜日午後二時に開會する事とはなれり如上の緣故を以て教友會は毎會之れが開會の準備をなす事を約す

◎徳風會(第一高等學校) 本校有志者より成れる徳風會は、佛教の感化によりて精神の修養に力め、信仰の確立を期しつゝありしが、其創立は遠く今より十數年の前にあり。爾來幾多の星霜を経來り、時に隆替消長の厄を免れざりしと雖も近時思想界の動搖激甚なるにつれ、青年にして信仰を求めんとするもの漸やく多きを加へ、從て我會員も著しく増加し、今や其數百有餘名の多きに達しぬ。何れも眞摯なる求道聞法の士ならざるはなし。殊に一昨年よりは坐談夜會とて信仰談話會を催す事となり、會員は膝を交へて互に内心の經驗を披瀝し、佛陀の救済を談ず、法味室に滿ち歡喜室に溢れざるはなし。今少しく先學期(自九月至十二月)に於ける例會及び坐談夜會の狀況を記さん

▲第一例會(明治三十六年十月三日(土曜)午後一時より駒込西教寺に於て)

講師は文學士近角常觀先生、文學博士前田謙雲先生にして聽衆七十有餘名、先づ近角先生は熱心なる態度を以て、禪尊が人生に對して身現しく幾多の經驗を重ね、内心の苦悶に迫られて出家得道し。遂に人生宇宙を遠觀して成道せられし顛末を語り、吾人も亦釋尊の教に従ひ十二因縁を觀し、八正道を行するとによりてよく現在の苦悶を解脱し、救済の光明に接し、こゝに平和と安慰とに充てる生活を行ふを得べしと説かる。

次に前田先生は丁寧懇切に修養の忽にすべからざる事と、内心に確固たる指導者あるに非れば、如何に意志の健固を誇る人と雖も。浮世の暴風驟雨に打ち勝つて、成功の彼岸に達するは至難なる旨を説かる。

つた由來を語るものもあつた。何れも、其面には誠意が表はれ、熱情が溢れて居る。やがて、八時には寄宿舎のものは總休歸つたか、後に残つて、十時頃迄も居て、話をやつけたものもあつた。第一例會が盛んであつたやうに、今度の坐談會ほど、盛であつたのは、今迄にはなかつたのである。

▲第二回 十一月十二日の午後六時から、同く求道學舍で開く。集まるもの十九人。先生の膝をかこむ事は前さ少しも異ならぬ。談は主として、修養上の事であつた。理想と現實とを甘く調和するには、何すればよいかとか。哲學と宗教とか、衝突して困るとか、意志が弱くて、實行が出来なくて困るとか、云ふのか重て、先生は一々解釋を與へ、又宗教上の慰藉を與へられた。例によつて八時に歸つたものと、後まで残つたものとをかあつた。

▲第三回 矢張り例の如く、十一月廿六日に開いたが、ドー云ふ間違か出席者は僅に四名。雜談(と云つても、元より宗教上の雜談)で世間話の意ではないので、其夜はすましたが、非常に愉快を覺えたのであつた。別に之を云ふて、纏つて居ないから、書く譯にはゆかぬが、只何となく陶然として、酔ふとも云ふ様な、丁度極樂の莊嚴の美のみに打たれて、恍惚となつた、さても云ふべきであつた。

◎報恩講求道 舊臘廿五日、求道學舍に於て親鸞聖人の古を追想して報恩の誓みを行ひぬ。當日南條博士一場の法話を述べるべく快く來會せられたり。來會者の重なるは齋藤唯信師、小河滋次郎氏秋野仲三郎氏、浩々洞の諸氏にして、午後四時靜肅なる讀經終るや南條博士は嘆異鈔の第九節に就て一々噛みくたくか如く述べられぬ。殊に「久遠劫よりいま、で流轉せる苦惱の誓里はすてがたく、未だむまれざる安養の淨土はこひしからずさふらふこと、まことによく／＼煩惱の興盛にさふろふこそ」云々の句に就て行誡上人の逸話を語られたり曰く。或人行誡上人に問ひけらく、さそ耳が遠くて御不自由ならぬと申けるに、否とよ、祖師法然上人の如き、娑婆に執着なき方は目も耳も、手も足も打揃ふて建曆二年の春

御淨土にひきとられぬ、惡業強きこの行誡は、苦惱の舊里棄てかたく、なか／＼一節細てゆかぬ、先づ耳からさきなくづしに淨土へ引き取らせ玉ふ大悲大慈の御方便にて、漸く耳で造る罪丈は免るることを得たりとて深く喜ばれたる實話を説かれぬ。滿座皆肅然として聲をのみありかたく傾聴しぬ。右の法話終りて心斗りの御齋を皆々に供しぬ。學舎の人々も合せて三十名にあまり、食卓は頗る賑ひ且つ盛なりき。後ち茶菓を出して互に心の曇りを打ちひらき色々の清話に時を過し散會を告げぬ。

◎日曜講話

年改まりて求道學舎第一回の講話は去る十日を以て開きぬ。近角氏は京都大谷派改正事件に付つき西上せられたるを以て、前田博士と楠氏の講話ありたり、同博士は信行に就て二河白道の譬喩を擧げて説き、信と行とはもとより不二不離なれども、行は社會の道德と相携ひ相伴ふべきものなれども信はそれ以上に超絶せるものなるを語られぬ。楠氏は小宇宙論に就て宇宙其者には惡も醜も善も美もなし、然るに吾等は美なり醜なりとして之に拘はるは恰も海濱の蟹の寄生する貝殻の如きものにして、貝其者には何等の意味を保たざるを説かれたり、此日の聴者五十餘名、これ新年第一聲の説法なりき。

▲一月十七日(第二回) 荻野伸三郎氏は或人の質問に答ふとて、

乃ち日本人は樂天家にあらずれば、厭世家にて極端より極端に走れるは日本人の性質也、これ佛教思想の馴致し來りたる病根なりとざる教育家の速断は當れるや否やとの質問を受けたるも、こはあまりに歴史を單純に見誤りたるものにして、鎌

倉時代に於ける宗教の人心に影響し來る事等を考へ來らば佛教の興へたる利益をあれ、弊害は少しも認めざる也、寧ろ宗教の衰ふるに從て人心の萎靡したるは争ふべからざる也、厭世的宗教を排斥せらるゝかは知らざれども、宗教の立場として何れの宗教と雖も厭世にあらざるはなし、これ獨り佛教のみ厭世にあらざるなりとて厭世決して非なるものにあらざるを述べ最後に日本國には露國トルストイの如く一大偉人の出現せざるなきを悲むとて現代人心の浮薄にして信仰なきを喝破して壇を下りぬ、次に上杉文秀氏は性格論として、先づ信條を見んとするものは教祖の人格を伺ふを要すとして親鸞の性格を三條に分て、一學者としての親鸞、二道德家としての親鸞、三宗教家としての親鸞の三者に區分して縦横無盡に説破せられ、頗る遺憾なく述べられぬ、此日風烈しき爲めにや聴衆三十名あまりなりき。

▲一月廿四日(第三回) 楠氏は觀無量壽經を讀むと云ふ題にて觀經は定善十三觀散善三觀合して十六の觀法を説きたるものなれども是皆方便誘入にして眞實安心の道にあらず、されは經の終りに「汝好く是語を持て是語を持てとは即是無量壽佛の名を持てよとなり」とあるを見れば正さしく念佛の一門にあるとを知るに足るとを述べられたり、次に近角氏は理想は人を靈化するの題にて京都東本願寺門前に於て法の爲め國の爲め一片の衷情抑へかたく一封の書置を残して割腹したる兒玉次郎吉の事に就て、現代の人心の不眞面目なるを説き、兒玉某の今回の自殺其者の是非は措いて論ぜず、兎に角かゝる偉大なる理想はこれ天の聲なり、佛の聲なり、理想は人を靈

化するとは此事なりとて、たとへ田夫野人の言なりと雖之を排斥すべきにあらず、吾等に取りては大なる教訓を残しおかれたる所以を詳細に説かれたり、本日寒威嚴酷なるにも拘らず、聴者六十餘名なりき。

▲大谷派寺務革新事件

多くの新聞雜誌によりて之を傳へ、之を報せられたる大谷派革新事件は、今更云ふまでもなく、今回の擧は全く兩法主の英断によりて發表せられたるものにして、何人も露露の感に打たれざるはなし。而して二十餘年來松風蘿月を友とし京都塔之段に高臥したる篠原氏は新法主の尊命に感泣し、老軀を提げて革新の衝に當りぬ。其趣意は如左

一、權門に依頼せざることを、二、教權と俗權とを區別すること、三、儀式を省略すること

にして、舊役員渥美總長以下を罷免すると共に、一方には井上伯の財政顧問たるを斷り、新職制を發表するに至れり。一たび革新の報傳はるや、兩法主の尊慮を慰し、かねて報謝の志を効さんとして、諸國の門末信徒陸續として京都に馳せ上りぬ。

▲舊事務所側の反抗 是より先き老法主は寺務一切を擧げて新門に委したるを以て予は之に關せずとて、近衛公の葬儀に列せん爲め東上せられたり。而して其間に舊役員派は容易に寺務引繼をなさず、剩へ職制廢止届の却下を幸として、法律を楯にして頑として動かさず、空しく時日を遷延するに至る。

▲内務省の交渉 改正局を設置し併せて從來の職制を全廢するの届出は内務省と再三問答の末十六日に至りて本山は從前の寺務職制を維持するととして、内務省の交渉も舊役員派の態度も悉く解解を見るに至りぬ。同時に同役員に歸休を命じ新役員を選任し、著々革新の趣意を擧ぐるとに勉めつゝあり、前途益々多望となりぬ。

▲彙報 革新事件の起るや、東京より南條、齋藤、近角、吉田、月見池山の諸氏相前後して西上せられたり、諸氏主張の要點は如何なる外権勢力にもよらず漸進的關係を根絶する事の二點にありと云ふ府下百三十名の未寺は革新事

件に對して兩法主に建白を捧げぬ▲東京帝國大學哲學部、早稲田大學、高等師範の各校に在學せる大谷派學生は、此際奮然として無量壽經を讀み、親しく老法主に謁して建白する所あり、次で四京に委員を派して新法主に謁し大に當答する所あり、更に檄文を全國有志に飛して、今回の革新を遂行せられたるの意を通せり▲これ東上帶在中國有志は去る廿五日南條大律師を從へて歸國せられたり▲新法主は自下御病氣とも見ぬ程の元氣にて、日夜改正に關して苦慮せらるる由▲去月廿三日大會にては東上せる老法主の歡迎會を開き時局に付き懇談する所ありたり

編輯餘錄

▲高輪佛教大學事件 さきに袖を隠れて辭表を出したる、佛教大學長前田博士以下職員一層に對して、此程本山より辭職を辭令下ると共に、武田篤信同學長に新任せられ、且つ職員の補充ならしめ、大に反對の氣焰を擧げざる由。尤も前田博士一同は各地に遊説を試みつつ、大に反對の氣焰を擧げざる由。云々

▲高田派本山寺務改正 向本山にては今回寺務上に大改正を加へ、先づ得度試みる儀式の試験を廢し、教師非教師を擧げて布教の自由を許したる如きは、其重なる項目なり。要するに繁文を擧げて簡易に就く趣意なりと云ふ。

●本誌改題と共に多少体裁を改め候が、尙漸次改良を加へ度積に候。振假名も試みに加減を施し候。

●海外の宗教事情は次第より掲げ可申候。

●信仰に關する質問は御隨意に候得共、成可教理の研究に關する質疑よりは信仰の問題に於ける高等師範の佛教會の景況、并に大宮の教勢等は紙面の都合により次第に譲り申候。

●本誌の編輯に於ける編輯室の有様は荒れ果たる戦場の如く、紙片散亂僅に膝か容るの席をあたするのみに候。吾々が仕來におへる程に候。

●本誌表紙繪は齋藤伯田英作氏の揮毫に候。置み、其厚意を謝し申候。

●道々春風得意の候に相成候得共、日露問題は依然として寒氷に鎖され居候。總運籌も眼前に迫りつゝあるにも拘らず、奮合し其聲は聞えず候。以上。

日曜講話

毎日 日曜 午後九時より
本郷 森川町
求道學舎

第二求道會

毎土曜日 午後二時
九段 坂佛
教俱樂部

注意

- 一、喜捨金爲替振局は本郷森川町郵便貯金爲替取扱所宛若くは第一銀行宛御取組み奉願候
- 二、爲替受人宛名は東京本郷區森川町一番地求道學舎近角常觀宛にて御送附奉願候
- 三、喜捨金御送附被下候節は直ちに發起人より受取差出し月々求道紙上に於て報告可仕候
- 四、喜捨金は直ちに第一銀行に預け込み可申候

求道會館設立喜捨受領報告(第三回)

| | | | |
|--------|-----|------------|------|
| 一金五拾圓 | 加賀 | 八田 | 智證殿 |
| 一金參拾圓 | 同 | 梅原 | 讓殿 |
| 一金參拾圓 | 東京 | 文明堂清水金右衛門殿 | |
| 一金貳拾五圓 | 同 | 白土 | 幸力殿 |
| 一金拾五圓 | 越前 | 久末 | 嚴淨殿 |
| 一金拾圓 | 加賀 | 但馬 | 現曄殿 |
| 一金拾圓 | 越中 | 玄巢 | 慶祥殿 |
| 一金拾圓 | 越中 | 五十嵐 | 成滿殿 |
| 一金拾圓 | 同 | 塚本 | 慶雲殿 |
| 一金拾圓 | 加賀 | 中野 | 嚴華殿 |
| 一金拾圓 | 伊勢 | 鈴木 | 悌殿 |
| 一金拾圓 | 在米國 | 小林 | 眞純殿 |
| 一金五圓 | 同 | 同 | 人殿 |
| 一金五圓 | 東京 | 長岡 | 壽美子殿 |
| 一金五圓 | 即納 | 清澤 | 現英殿 |
| 一金五圓 | 越後 | 田宮 | 宗城殿 |

| | | | | |
|-------|----------|--------|----|-------|
| 一金五圓 | 即納 | 同 | 長部 | 松三郎殿 |
| 一金貳圓 | 即納 | 陸中 | 永井 | 濤江殿 |
| 一金貳圓 | 即納 | 第一高等學校 | 三井 | 甲之助殿 |
| 一金壹圓 | 即納 | 同 | 山下 | 汎殿 |
| 一金壹圓 | 即納 | 同 | 岩波 | 茂雄殿 |
| 一金壹圓 | 即納 | 東京 | 今井 | 甚太郎殿 |
| 一金壹圓 | 即納 | 上州 | 井野 | 定次郎殿 |
| 一金壹圓 | 即納 | 越後 | 長尾 | 芳麿殿 |
| 一金貳圓 | 即納 | 加賀 | 黒崎 | 龍祥殿 |
| 一金五圓 | 同 | 越前 | 松田 | 現芳殿 |
| 一金五圓 | 同 | 三河 | 鈴木 | 了道殿 |
| 一金五圓 | 同 | 同 | 石川 | 了觀殿 |
| 一金五圓 | 即納 | 茨城縣 | 笠原 | 了定殿 |
| 一金參圓 | 當分の寄附として | 信濃 | 太田 | 秀穂殿 |
| 一金壹圓 | 同上 | 同 | 水野 | 了天殿 |
| 一金壹圓 | 同上 | 同 | 丸山 | 忠次郎殿 |
| 一金貳圓 | 同上 | 同 | 水野 | 三右衛門殿 |
| 一金貳圓 | 同上 | 同 | 佐崎 | 新喜殿 |
| 一金五十錢 | 同上 | 早稻田大學 | 清水 | 拜藏殿 |
| 一金五十錢 | 同上 | 臺灣協會學校 | 井山 | 吉殿 |
| 金壹圓 | 同上 | 同校 | 山本 | 雪三殿 |
| 金壹圓 | 同上 | 若松市 | 某 | 同志會殿 |

小計 二百八拾八圓五拾錢
通計 六百七拾圓七拾五錢

文學士 清澤滿之序
文學士 近角常觀著

信仰之餘瀝

全

上製二十五錢 並製十五錢 郵稅二錢

今般第四版發行致候。上製は總クロースにて頗る美麗なる冊子に製本仕候。携帶に至極便利に相成候間續々御愛讀希上候

本郷森川町一

發行所 大日本佛教徒同盟會

文學士 近角常觀著

佛弟子小傳

近刊

發行所

本郷四丁目

文明堂

佛教婦人

(第四卷第一號)
一月一日發行

▲毎月一回五日發行▲價一部金六錢▲年金七拾貳錢▲郵稅不要

高尙優美なる口繪一葉添う

家庭の改良といひ、社會の改善といひ、新日本の經營年と共に多端ならんとす、而して是等諸問題の中樞にして且つ最も急務なる者の一は、實に婦人品性の陶冶にありて存す、婦人品性の陶冶單なる教育よく之を果遂するか、單なる倫理よく之を完成するか、否斷じて否、吾人は唯如來の大慈悲のみ此大理想に到達すべきを確信す、本誌は吾人が滿腔の赤心を以て其確信を吐露する者なり、熱誠ある婦人は來りて如來の大慈悲海に浴せよ。

發行所

東京巢鴨
二二五五

家庭社



譬如大海一人升
量經歷劫數尙可
窮底得其妙寶人
有至心精進求道
不止會當剋果何
願不得

〔大無量壽經〕

